兩子雜組

十

昭和十八年十二月吉祥

特別
14
1919
481

176746

雨子雑題第十

昭和十一年十二月上浣起草

の五月林谷安田芳次郎の葬儀茶花西本敬孝と
於て営まる、午前の儀を特別参列を受けれが、度々
を懇想と行かず、午後の葬式に臨み一時間行うても
参会者を通へれ。隠人の盛儀に行立者のみ三百人、
会葬者は参拾二千と注せられ、如斯は近来稀
なる。西田の宗本教寺流を原とするが、偶と白寺に
遠忘かありて、西の会場を偽しれのみをうるに自分の一西
の新築の別院の外部へ初くを通りて見れて
つが内部の始めを一読へれ。大うる葬儀を行ふ

38- 9267

御令孫弘様御焼香

輓詩

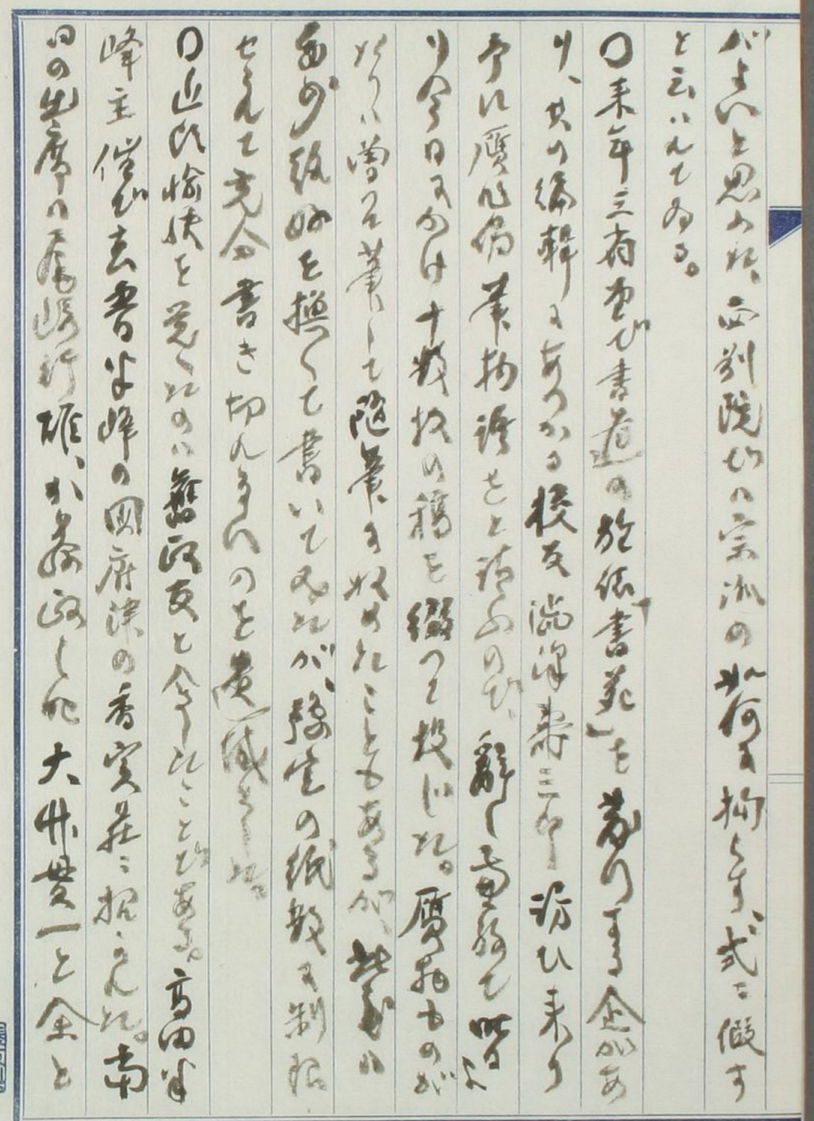
孫光積善今名聞
朝執牙籌夕誦文
何忍外遊幽未返
秋風菊露送行君

寶達院殿事前
鹽谷溫謹輓

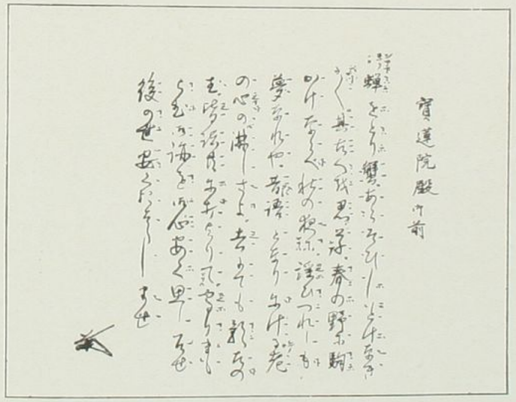
十月二十三日會長安田善次郎殿忽焉として逝き給ふ。悲しい哉。我等悲しみに咽びて言ふべき言葉も無し。その御人格の高き、御慈愛の深き我等同人數千の敬慕の的たりしものを。噫悲しい哉。

御逝去の報、到るや畏きあたりより特に位記の御追贈を賜はるの榮譽ありぬ。

二十七日御密葬を執行遊ばされたり。謹みて哀悼の御寫眞を掲ぐ。



御柩を見送る



安田善衛殿手向けの御歌

自分と同甲の大作と年を取ったが、あるものは死
んだり、大作は近頃病気で寝ている。私も病
をこじらせ、北の国の冬の寒さにつれて、言葉の別れを
惜しむ暇もなく、急ぎ、紫の毒ばかりであった。
北の人々全体の同甲の高田大作と余と生まれ月から
言えば、余は二月十日生まれで、大作は三月十日。高田は三月
十四日で、余が最年長で高田は若いと言っても誠に強つれ
尾崎が自分を高田のほうへ、強引にあるけれども大雪
をもってことがあるので、どこへ行けば大雪かなんかと言うから
高田へ行けと言ったら、その行き先の旅館をも教えて呉れた。
尾崎は三十年前、葉巻煙草の大きなもしゃれあって
が手が振るいのので、煙草を今も持参をしてけまあ

酒は、どうかと聞くと二杯三杯位は全くうまいが、忽ち顔
がみるみる赤くなるから、そんなに飲んでもあれは私を向
こうへ書きたいと言って、閉口する二合をもらえると、全く無
理解で、政治以外全然、政味のない人で、北国は木堂
と全く異ったもの、何者も酒も呑めず別に政味も
ないようなもので、丈夫な寂寞さる白い思いやるまい。帰上掛
蒲団の美幸、玉造河岸で、ひとりこの新しの即詠の和歌を詠めれ、尾崎の年の
数奇夫が、俗体、まることが、例で、ないから、言葉が附き添えもあれ。
加藤と浜次、往年自分の四星四星の離時四星
の自分が関係したことを想出した。あの時は国つれと自分

いふあれば、かなぶんは表が中まで土つぢから出るが、何もまのずれ石
しかと言つたが、かなぶんの嫁が星型の子をいつしか嫁して
ゐたのを自分の知らぬうちに離縁をしたとて先生
が自分に報ずれば素直に初めてもつて譯がわかあんなつ
まらぬ縁目いるのだ。かなぶんが星型の後妻のこと
を考へんとが自分も其後は一向教子をもらうとは
らぬがうるさい。
尾崎は順次誘ふ自分をも神経病が時々起つて悩む形
に陥ることがある。或る夜つぶん下を抱いて寝ると
いつしか蛭が潜んで附着してゐるとのうんうんべつこう
つとさいこんを痛さを感じたが家
は神経病に起つて。此の蜂の針と毒とを注ぎ

作用あると云ふものがあるが、或人曰はく、と云ふに。
○四年前の事なれば、の貴重品が数度さらされて往々いうまぶ
現のんか。自分も其四次一杯喰いまれた。丸じんの貴重品
に薩摩焼の花瓶に河茶碗を彩色船を彩色で今の
あるのが、あるに、薩摩侯が河茶碗飯味のあつ
ことをも伝んで、おもしろいと思ひて嬉しまり
よくくゆることと、どうも今が新しいせしに感せる
ばかり、果して今のあとで拙き宝に入れたるものである
ことがわかれた。一杯喰のたれかうんぬ一紙驚ひある
○大阪の朝。冬から冬を関する酒業をと嘱
やん、一寸困つたが、雪の都」と題する一稿を寄
せた。初雪の思ひ出を次郎の書のようなきれ、一夜

大雲がもつて望郷道の意かつたこと、庭樹の雲を屋
ちんれこと、まゝ雲間ひの用意の無つたこと、雪中の
用具を初めて拵へようと元出したこと、所々の雲景
雪をまぶしがるい性分見あるのみのあること、など
を敢して見れ。

○安田長次郎の骨董に納めの日誌銀八分田高
家の手を成つた、と記齋らしく来たのを見ると
地金銀七三村井信の拵えと書を刻したもの。
其の拓本の左のぬくもりもある。

○鯨所録の序をどう書くべきやと惑みれが、鯨所
所の二字る就て随筆体に云いれ一篇を鯨所
笑話と題した序をかくも苦首に耳くこと

複原製

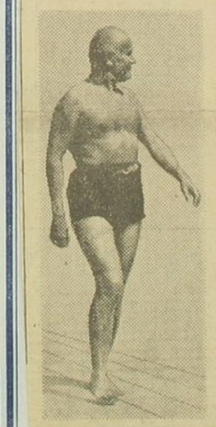
寶蓮院釋行承居士　正五位勲
三等安田善次郎號雅園明治
十二年己卯三月七日己丑生
於東京小網町至茅場先業好
古藏寶書昭和十一年丙子十
月二十三日代寂年於麹町平
河町莲於音羽護國寺

コレが鯨所の二字は無用の長味なと思へば
其典故が確かめ。或るこの鯨八百川を呼ぶ

最酒家を悪徳する肝は酒を司る脳脚酒客
往々肝脚を病む酒客の陶然たるものしい
ものあり或は云く言の肺肝なる真実なり然
肝は大真実を現はすものなりと肺肝
肝油はビタミン素と富むを以つて滋養剤と
せらるるなり

昔を偲ぶ跣足行進

野人・ム首相上々の御機嫌



ムソリニ首相は上々の機嫌で官邸に入つた

【ローマ三十日發同盟】イタリー下院は三十日夜開會議事終了後ムソリニ首相は待たせて置いた自動車には乗らず突然附属九名及び下院議員に對し、曾て建設の苦を偲ぶ恒例のベルサリエリ(突撃)行進開始を命じ自ら跣足で先頭に立つて議場を出發、開原広に下院議員一同は九列縦隊を作つてパラツツオ廣場を横斷ベネチュア宮迄跣足行進を續けたベネチュア宮に到着すると共に一同はファシスト黨歌ジオヴアネツツアを高唱この突然の跣足行進にローマ市民は唖然として見送るばかり警官隊は交通整理に大童であつた【寫眞はムソリニ首相】

樣原製

なんぢ デカイ無用、大変的無用を御覧なさる、無用なる無用の用と云ふがある。然し自分の説が誤つて大いに有用のものとなつたとすれば、自分の本意なるべし此書の名答もあるまはけれども、自分の社会的と云ふ所謂変りの問答が唐の要旨なり

○素裸うなりかソリニー、若しの姿を示すと云ふも内閣から駆け出す元氣は、日本改造家に見る所とする也

○日本図書協会雑誌と本年一月より毎号余の随筆「而子雑記録」を十一回載せ十二月と左の記載せしのが最後となる。

丙子雜錄（十一）

松霞安田翁の深秀園

＝大震災に亡びた名園の一＝

大震災の阨に遇ふて都下の名園の亡びたものは一にして足らない。中には修補を經て多少回復したものも無いでもないが、絶望的の荒廢に歸したるものが少なくない。安田松霞翁の本所横網の別墅などは其一である。

園記を案するに、翁の別墅は頗る來歷に富み、三諸侯の邸趾が一處にあるだけでも稀有の史蹟である。此園の廣さは南北一百三十歩、東西之れに半ばし、中央は元祿年間高崎侯の築造に係り、明治の初年田安公の住した所である。南は茶博松浦鎭信公の隱居所で、北は享保年間加納侯が幕府から賜はつた車茶屋と稱するものであつた。上陳松浦公の隱居所には白藤庵と云ふ有名な茶室があつて、元祿年間赤穗の遺臣が仇家を襲ふた時、公は偶々此茶室で自ら茶杓を削りつゝあつたが、復仇の報を聞き、茶杓に「夜擊」の銘を附したと傳へられてゐる。また加納侯の車茶屋と云ふは、車輪を窓桙に用ゐた築造で、斯る名があつたのだが、庭中の石は皆石臼を用ひ、飽くまで輾轉の意を寓した好事のものであつた。

三諸侯の舊趾が一處に集まつて茶趣橫溢の景致を有することが、名園たるに充分の資格を具してゐる。尙ほ其上に諸名家の舊物の此園に歸し風趣を添へてゐるものが一にして足らない。卽ち書院の階下にあつた古銅の巨燈は筑波山寺の物で、それには寬永十年大樹公云々の銘があり、閑林亭と云ふ室は曾つて尾張公の書齋であつたのを翁が申受けて爰に移したのであり、白藤庵の西に「又隱」の扁額を揭げた方丈室は茶博千宗旦が世塵を避けて隱栖した室で、宗旦の遺族が田安侯に獻じたものである、石佛育兒地藏尊は秋元侯の舊物であり、藥師堂は元と毛利公邸內にあつたのを移したものであり、芭蕉の古池の句碑がある外に、名工與次郎が作つた鐵燈で「河童」と名付けられたものがある。尙ほ一二由緖ある茶室もあつたが、漏らしてならないのは椎の大樹である。これは松浦家の舊物で、此樹のあるため椎の木松浦とまで云はれた名木で神として祀られてあつたものだが、惜しい哉皆亡びた。唯幸ひに此の椎の實が植木職の手で培養され、今は成木して安田氏の現在の園中に移し植へられたが、氏に近年椎園の號のあるのは此故である。

以上は園の梗概に過ぎないが、唯だこれだけでも園は史蹟並に茶趣味の淵叢の觀がある。尙ほ橫網の此地は自然の風致に富み鬱蒼たる大樹あり、楓葉あり、池蓮あり、莓苔あり、園前には巨川が流れてゐる。園名は成島柳北の命じたもので「深秀」の名はよく園の特徵を現はしてゐる。自分は安田氏父子と舊あつて、災前屢々訪問しながら、園を見るに及ばず、亡びたのは如何にも遺憾に堪へない。頃日安田氏を訪ふて席上園記のあるのを一覽した。先代松霞翁が華甲壽宴の時大槻如電氏の選んだ文で、園の狀況がよく敍されてゐる。卽ち其の園記の全文を左に收める。

深秀園記

深秀園。在東京隅田河東橫網第二坊。爲安田氏別墅。正門面水。入則三層石閣。巍然高聳。曰成務館。構造準洋法。館左有門。門徑一曲。有玄關。有書院。有水樓。有茶室。整然廣厦。曰懷德館。館前水深樹秀。是成島柳北所以命此園也。園本三侯乙第。南北通一百三十餘步。東西半之。中央爲高崎侯邸。元祿中所築。喬木碧水。古趣靄然。明治之初。田安二位公居焉。南則松浦侯邸。係鎭信公隱棲。世傳。赤穗遺臣之襲仇家也。公時在白藤庵。手製茶匕。深夜聞鼓鼓之聲。心知良雄等義舉。竟名其匕夜擊。此地是也。北則加納侯邸。侯先爲有德大君親臣。蓋享保中賜第。舊有稱車茶屋者。車輪爲窗格。而趺石悉用石臼。亦取其輾轉也。今主人合三邸一之。在明治戊寅以降。仍不改舊貫。但有疏兩池爲一水等耳。書院階下。銅製巨燈。筑波山寺舊物。銘有寬永十年大樹公等文字。趺石幾十。間存古石臼。池畔北轉。楓林小丘。曰紅葉山。卽車茶屋墟也。楓外小舍。方不滿丈。曰閑林亭。尾張一位公看書處。舊在河西。往年公割愛主人。因移焉。今則可以看池蓮。丘北石佛。爲育兒地藏尊。秋元侯邸舊置。傳云。一里塚上物。其後隴有藥師堂。亦毛利侯邸所安置。邸俱在濱街。今皆歸主人。故移焉。堂側一碑。刻芭蕉翁所咏池蛙水音句。碑陰有記。按翁廬。當時在深川六間堀。後爲尼崎侯邸。文政中。有故徙其邸鐵砲洲。爾時所建。主人近獲之亦移焉。其南福德稻荷祠。田安邸遺構也。林下路窮。忽通短橋。蒼石橫臥。古燈照人。步至池南。老槻蓊鬱。下有藤花架。此地爲白藤庵故趾。稍西有方丈室。扁曰又隱。在昔茶博宗旦。既致仕。尙且築此屋。以謝世紛。所以名又隱。傳在西京千家裏園。田安公深通茶儀。追慕之餘。遣工就其家模之。裔孫某以爲名譽。併屋及茶博所筆又隱書幅。以獻。此室是也。前庭安一銕燈。扁而卑。狀甚奇。銘曰河童。天正中名工與次郎所作。樹影扶疎。莓苔紺碧。自是洞中天地。使人有遺世脫塵之想。而中潛戶待合舍。斯道諸規。悉具。此他有養淸庵半齋等茶室。亦公所造。俱在懷德館內。今不具述。鎭信公吾邦盧陸。其隱棲趾。而設此又隱。兩公風流。香色可味。曲徑西繞。有門常關。門外平蕪數百步。乃成務館後庭也。其沿外垣處。有古椎樹。龍蟠虎踞。不知歷幾百年。世有椎木松浦之稱者。環以短籬。神而祀之。此樹隔河水。與首尾松。蒼翠相望。古來稱爲東都一名勝矣。

嗚乎。名園歸名士。抑亦非無謂也。主人號松霞。中越人。年十九。來江戶。從事沽販數年。元治甲子。始開兌銀鋪。爾來三十有五年。其業極隆。近十數年來。通邑大都。無不置支鋪。所謂安田銀行。是也。語云。秀而不實。以其立基不深也。主人執業著實。其本甚深。以致今日之秀榮也。然則深秀之稱。何啻此園水樹。今玆戊戌。主人齡六旬有一。以十月之吉。張華甲壽宴。大會諸同人此園五日。余見囑園記。宿諾多年。今遭此盛擧。豈可躊躇不履其約。乃筆其梗概。以爲遊此園者之指南車云。

安田善次郎君を悼む

＝圖書に就ての業績＝

安田善次郎君の訃に接したのは餘りに唐突であつて愕然とした。つい一週間前君の

宅で例の稀書複製會の同人と會した時は、君の健康に何等の異狀も無かつたのに、二十四日(十月)の朝、新聞を披くと、君の死亡廣告が出てゐて、忽ち幽明相隔つる人となつたのに、啞然自失し、人間の運命の果敢なさを今更ながら痛感して眞に斷腸の念に堪へなかつた。

病症をと問へば十二支腸潰瘍で急遽病が革まつたと云ふ。折柄嗣子夫妻の洋行中であるから誠に生憎で、享年僅に五十六歳、病症から推するに、君は近年酒を節してゐたが、一時豪酒であつたから、それが禍ひをなしたのかも知れない。

追想するに君との趣味の交りは、古るいことで、今より三十數年の舊に遡ぼらねばならぬ。君がまだ善之助と云ふて、本所横網に部屋住であつた頃、君に由つて催されてゐた欣賞會に入會した時から交りが始まつたのである。此會は馬琴などが昔やつた耽奇會に倣つたらしいもので會員には幸田露伴、林若樹、赤松範一、三村竹清、水落露石などの好事の士が、毎會珍奇な書物其他を持寄つて互ひに鑑賞した。自分と和田萬吉氏は後ればせに參加したが、毎會深更まで趣味談を闘かはして面白かつたことが、今も忘れられない。珍本奇籍を鑑賞するのみでなく、更らに進んで稀本の複製を企てたのは其後で、欣賞會の會員たりし、安田、林、三村、和田と余の外、内田貢、山田清作などの發起で出來た稀書複製會は、創立後既に二十年に垂んとしてゐるが、此會を中心として間斷なく安田君と交はり、一層交が深厚になつた。此會は世上に僅かに一二本傳はるのみで將さに絶えんとする、軟派の趣味の種々の本を複製することを目的として、百方博搜の結果、隱れてゐる奇籍珍本が世に現はれ、それが原本ソックリ木彫に付され、刊行されたものが五百冊にも迫んでゐるが、此事業の爲めに安田君は終始自宅を會席に充てられ、種々援助を與へられたことは勿論、君の豐富の珍籍も多く複製の爲めに提供された。毎月會する都度君の蒐集に係る奇書を示され、之れに由つて眼福を得たことは少なく無かつた。

私は性來愛書癖があつたけれども、趣味は何れかと云ふと、堅い方の書物にあつて、所謂軟派の書物を解するもので無かつたが、欣賞會並に複製會に由つて啓發され、軟派本に就ての智識を得たのは君のお蔭に由ると云はねばならぬ。安田君は部屋住の若い時分から愛書癖があつて、手元不如意の時早く珍書の蒐集を始め、專ら軟種の本に傾倒して、獲る所も多かつたが、不幸にして大震火に遭ふて全部烏有に歸したのは、如何にも惜しいことであつた。

安田君の趣味の範圍は震災後大いに擴大し、其の蒐集は軟種本に限らず、稀覯の古本と云へば、古經よし古文書よし古活字本よしと云ふやうに博搜の結果、世に珍奇と云はるゝ貴重書は大抵君の門に輻輳し、善本と知れば聊かも財を吝まず之を購ふことを快としたから、其の蒐集は莫大のもので特に建られた書庫も忽ち狹隘を告ぐるに至つた。君は財の豐なるに任して、徒らに多きを貪る亞流ではなく、圖書に對しては鑑識があり、晩年の蒐集は殊に科學的で、宋元の漢籍には指を染なかつたが和本に至つては書史の材料として備はらざるものなきに至り、實に偉觀であつた。

四五年前各圖書館の書物通が日本書誌學會を創設した時、君は其邸を同人の會席に供され、其の藏書を常に研究材料に充てられた爲め、便宜を得たことが少なくなかつた。或は雜誌を發行し、或は善本の標本を

續刊し、數々古書の展覽會を催すなど、君に負ふ所が多かつたことは周知の事實で絮說を要しない。君の財界に於ける功績は世人多く知るも、君の趣味的方面を知るものは餘り無い。君の此方面を理解しないものは、動もすれば資產家の道樂だと輕々に言ひ去れど、君が圖書界に盡した功績は決して沒却すべきでない。

尙ほ附記を要するは、君の金石趣味である。君は此の方面にも可なり蒐集に努力した。君の滿架の古鏡は千枚にも及んでゐるだらうが、皆な稀覯珍奇の名品で、某著名の藏鏡家のコレクションが全部君の手に移つてゐるので、全部が極めて精選されてゐて、世の多きを貪ぼつて如何がはしい劣品を混藏してゐる者とは全く選を異にしてゐるから、藏鏡家としても好古界に名高かつた。君は若年の頃から古錢家の守田寶丹と交はり、金石家の香取秀眞、三村竹清などの人々とも懇親であつたので、君の金石趣味の淵源も略々推察に難くない。君は嘗つて寶丹の鼓吹で古錢の蒐集に指を染めたとも聞へたが、其の蒐集は或は大震火で亡びたかと思ふ。此の消息は君の生前終に親しく聞くことを得なかつたが、蕭札狂と自稱した前田惇が半生蒐集に沒頭した幾萬の古今各藩各種の紙幣は、自分が大坂で前田の家に就て閲覽したことがあり、博物館所藏のものよりも豐富のものであつたが、これが前年君の購ふ所となつて、今は帝國大學に寄附されてゐるが、これは硬貨ではないが、君の金石蒐集の經歷の一端として漏す可からざるものと思ふ。尙又君は近年しきりに糸印の蒐集に熱中し、其の收獲は千餘に及んでゐる。此の糸印は古來好古家が愛玩する所のもので、奇古の文字と鈕に雅趣のあることが喜ばれ、百顆を藏する故を以つて著名の人もあるが、佳種を得ることが容易でない爲め、好事家は百も有すれば自ら足れりとし、人に誇つたりするのに、君の蒐集はこの部類のあらゆるものを網羅し恐らく君が此蒐集の第一人者であらうと自分は思ふてゐる。

私は君とは久しい交はりであるが、君の財界に於ける事業其他に就ては全然無交渉であるから、何等言ふべきことを持たない。君は極めて溫雅な人であつたが、親讓りの剛健の氣象は確に看取せられた。君は愛書と金石癖の外に、謠曲能樂に造詣が深く、どんな事を問ふても、立どころに明晰の答へを得た。君の趣味は段々向上して晩年は正倉院の御物拜觀を此上のない樂みとし、毎年拜觀を繰返し今年も十一月には奈良行を豫定してあつたのに、それも果さずに長逝した。

自分は友人を持たぬでもないが、同趣味の友人は甚だ少ない。殊に安田君の如く自分と同趣味であるのみならず、自分の及びもつかぬ趣味の寶庫を開放して、自分に眼福を與へ、自分の心田を開拓してくれた友人は、君の外にないのに、其人を失つた自分の淋しさは何んとも言ひ難いものがある。併し君を失つた悲哀は廣い範圍に於て自分に百倍するものがあるであらう。眞に國家の大損失である。(完)

○東京市の回史と云ふ神宮壁画集（坤）共二冊大の図書が同時に送入る筈なれ、自分の自分が多少異つたのと字句を変げ、後者の前年花巻と鶴ヶ崎と関係して今度完成したのであるが、之は趣味的の事だが興味尽きず愛読の日々を得る。

○自分の今次の随筆録所録のものは東京書房から出版されて出てくるのは、三四日前に校正が出てくるのは、三百頁の頃三百頁の頃漸やく校正刷が毎日毎日自分の多忙を活字で組まれて、アラを見られる訳ゆえ、但人間のやはらかさは出来ず不満足ながら校了とするのは、いつもながら不愉快である。（十

二月十二日の記

○世界の大子供として所謂ゆる子供は、先代の英皇帝の遺児子供で、それが片つくと支那で蔣介石が西安で監禁された事件がある。英帝が戴冠式を前にして一英人との恋愛問題から終に退位した事件と世界の耳目を驚動した事件とは、ともに先夫が二人もある米人シンプソンとして先夫が何れも英帝と同じく妖婦型と思はれるのが英帝をして放棄せしめ、別庭英王を治めて資産のあるとして手を切ったポルトガルが放逐したのであるかと

噂ばかりしてゐるかさて退位後の英帝はどうなることか、既に位を棄てゝ唯の人となんだ、婦人心愛恵をつゝして御夫を慕ひ奉ることが世の中の深山幽谷にかくれて戒名の法名を命じて落飾するのもうなづかるゝ

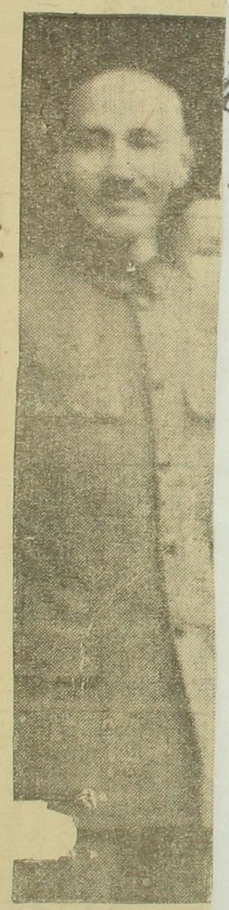
と義の為と仕てゐる。

蔣介石が妻人として西安の華清池に附添ひ張学良の手の中隊と親しく接し死ぬ蔣介石の生死の為に張学良が蔣に私情を抱いてゐることの思ひいとしかし北の妻の犯つたのは何となく吾が仕長の本能寺の変を思ひ起さしめる。

蔣介石の甘粕事件 前吾が高田の野砲隊に勤務し

たことがある人柄で、山っ子伝統的な人柄で、こんど失脚したのは義の為めである、義母劉氏も大変を(ちなみ)に張氏陥ると共に、張学良が北満に撤退することが真に為に雄ひあるが、古来北満を治めた人物は、張学良の例がある。歴史の保ち通すことこそ

の所謂を掲げてある



高田野砲隊に居た

蔣介石の思ひ出

廿四、五歳の食ひ氣盛り
市内の兩店に聽く

支那統一の覇業を完成して、近く大總統たらんとして居た英雄蔣介石、今は朔風凍る西安の古都に於て張學良のため監禁の身となり或は惨殺されたとも傳へられてゐる一突如此の凶變に遭遇した蔣介石、浙江省奉化縣の生れで本年五十歳の働き盛りだ、彼は保定軍官學校から日本に留學し當時の高田野砲兵第十九聯隊に入隊した、それは明治四十四年から同四十五年にかけての事だから蔣介石が二十四、五歳といふ青年時代であつた、そして同隊に勤務中第一革命が起つて上海に歸り、爾來二十五年、遂に支那統一を實現したものである、高田野砲隊在隊中の彼に關する話は餘り多く殘つてゐないが、何分にも食ひ氣盛りの時代であつたから、話はどうしてもその方面の事が思ひ出となつてゐる市内大町三丁目三ツ一洋食店と本町三丁目ワタヤ青果店に二十六年前の蔣介石はどんな人物であつたかを聞いて見た（宮崎は蔣介石氏）

自分で料理して
中々の贅澤振り
大食にも驚いた
三ツ一洋食店老主人語る

蔣介石氏が高田野砲兵第十九聯隊に留學勤務中日曜外出毎に下宿のやうにして留學生連中と寄つてゐたと云はれる市内大町三丁目三ツ一洋食店の老主人渡邊長五郎さんは左の如く語つた

蔣介石氏は初め大町二丁目三館旅館（現在の佐久間病院）を日曜下宿としてゐたのですが後私共へずつと來るやうになつて支那人の兵隊さんが多勢で毎日曜毎に來て遊んで居たものですなんかは私共のを食べるといふより連中が直接故國から種々な材料を取り寄せて自分で調理して食べるのですが調理は實に上手なものでした

料理

とても私共はかなひませんでした、亜人はいつ何時どう云ふ事になるかわからぬので調理は常に練習してゐるのだと云つてゐましたが、そして實に贅澤なもので、私等はチヤン〳〵だからと云つて小馬鹿にしてゐたもので、叱りつける位の事はしてゐましたが、その贅澤たけは驚きました、その一例を言ふと鶏二羽を煮るのに牛肉五斤位をダシに先づ煮てその煮出し汁でその鶏を煮て食べるといつた式で食物は贅澤極まるものでした

それに油などもなんと云ふのか知れませんが日本にないもので實によい香りのするものでした、そして食べるのもたいしたもので玉子など一人でまづ十個位づゝ一度に食べるといふ具合でした、酒は日本酒もビールも相當よく飲みましたが、女の點は確かりしてゐたやうでした、字も繪も相當上手で家にも書いて貰つたものがあつたのですがずつと前に人に與れてやりました、その人も火災にかゝつてそれも無くなつたらしいです、こんなに偉くなるものでしたらもつと澤山書いて貰つて置くのにと今頃後悔してをります

然し兎に角どこかしつかりしてゐる處があります、革命が勃發して歸國したのでした、當時北カから林と宗と云ふ留學生が來てゐましたが革命が起るやうでこの二人を隨がいぢめてゐたやうでその爲めこの二人はみんなと一緒に歸る事が出來ませんでした

私の店の看板を
無理に書かせた
ワタヤ青果店主人語る

又日曜毎に立ち寄つて果物類を買つて食べたと云はれる本町三丁目ワタヤ青果店主人關馬增吉さんは左の如く語る

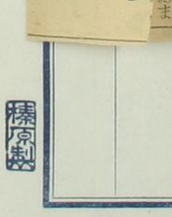
その頃私の處では薩摩芋のフカしたのを買つてゐましたがよくそれを食べたりリンゴや梨その他季節々々の果物を食べてゐました、當時日露戰爭直後ではあり連中はヤット伍長か軍曹だつたので私共は小馬鹿にしてゐたもので、私の店の看板を書かせる時も叱るやうにして無理に書かせたものですが『僕は本國へ歸れば偉くなるのだから書かぬ』と云つて頑張つたものです多勢居る中でどこか變つたシッカリした處があつたやうです、そして剛情でもあつたやうでした

廿四、五歳の食ひ氣盛り
市内の兩店に聽く
白分で料理して
中々の賛譽振り

支那統一の偉業を完成して、近く大總統たらんとして居た蔣介石、今は朔風凍る西安の古都に於て張學良のため監禁の身となり或は幽囚されたとも傳へられてゐる。突如此の凶變に遭遇した蔣介石、浙江省奉化縣の生れで本年五十歳の働き盛りだ、彼は保定軍官學校から日本に留學し當時の高田野砲兵第十九聯隊に入隊した、それは明治四十四年から同四十五年にかけての事だから蔣介石が二十四、五歳といふ青年時代であつた、そして同隊に勤務中第一革命が起つて上海に歸り、爾來二十五年、遂に支那統一を實現したものである、高田野砲隊在隊中の彼に關する話は餘り多く傳つてゐないが、何分にも食ひ氣盛りの時代であつたから、話はどうしてもその方面の事が眼ひ出となつてゐる市内大町三丁目三ツ一洋食店と本町三丁目ワタヤ菓子店に二十六年前の蔣介石はどんな人物であつたかを聞いて見た（寫眞は蔣介石氏）

張學良氏

西安から電話　一方鄭州よりどう圃に至るろう州線一帶客車の運轉を停止いたしどう圃に向け出動を開始し北平十四日發　河南の鄭州特電は十三日午前からろう州線列車は西安に引き返しつゝあるが一方陝西省北部に於て共産軍討伐中の中央軍南京戰は急を要を取らんとしてゐるので同方面は全く混沌たる狀態に陷つてゐる

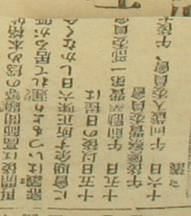

張學良氏

私の店
無理

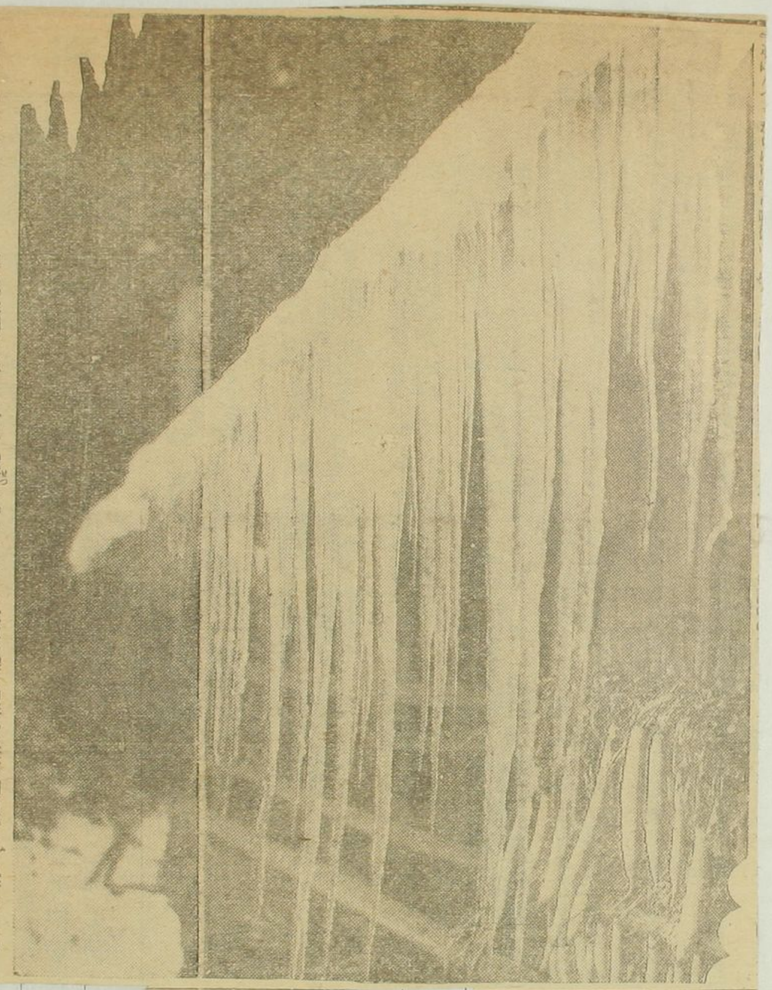
とても私共はかなひませんでした、軍人はいつ何時どう云ふ事にとて

又日曜毎に立ち寄つて果物類を買ひ求めつて食べたと云はれる本町三丁目菓子の問屋ワタヤ菓子店主人關口増吉さんは左の如く語る

その頃私の處では薩摩芋のフカしたのを買つてゐましたがよくそれを食べたりリンゴや梨その他の果物を食べてゐま



東北雪だより



東北の雪國では早くも一尺　積雪は珍らしくなく、寫眞の樹々の物凄い氷柱が到る處に見る樂さだ（盛岡市外にて撮影）

○自分の家と毎日數軒を主へ根性日本橋色と足を向けフカ、芋を買しまつてまるから、何もかも日々楽んで一向奥味を感じなくなつたデパートや主流

る堂々たる店舗のあるもあれば、大通りの高所に前面がずらりと並んでいる。裡面から見へる納屋から一種の味がある。名工や達人などい決して表面ばかりの飾りのみも思ひくて其個性を現はしてゐるから、建築も面白さ、レヨウ、ウエンドウの飾りのみも思ひくて其個性を現はしてゐる、ここに於ては、その風景が殊に美しい。料理屋もあれば酒場もあれば珈琲店もあれば麻雀荘もあれば、洋人の住居もあれば、大通りの高所に前面がずらりと並んでいる。裏面から見へる納屋から一種の味がある。名工や達人などい決して表面ばかり

横浜の家屋の建築を見る、一軒西洋人の居る家の前に大きなびーる樽ビンが二本美しくみれ、二十位迄のビンが廻いると中から黄い西洋人が現れて出れば、ビンは廻りあることが知れた。じゃ〜馬バアと言ふ看板もあつた河岸のジヤ〜馬から名つけた名であらう。みんごうやうどと言ふ割烹屋も多いが、其看板に隠宴屋と書いたものもあつたが、飲食屋と言ふも沢山あるうちと自から奉仕を己きた。太古楽と言ふ割烹屋も沢山ある馬鹿な珍奇をつちのけの名をつけたものだと飯計を語り得るうつた。縄暖簾とこの方面の雅いのがいくらもある。源氏の大限るで時なほさう家がけそこ割烹の美を以て誇つてゐる。

横原製

るが、小物屋なども洋和共に珍くいものが出てゐるのが多く横浜にある、大通りびか洋物屋がうまく成り立ち得るのも双葉屋の如きい大通りの店を撤したのの働きが多く、珍物の小店を見ることを苦しかり方法が極まつて長るやうで、訳に飯味のシヤレタ物を見る内の概略横浜の小店を出したるる。安さん大通りの「ポート」なども今迄沢山の店がある、横浜の個人商店が多い洋物が趣味の河岸のうちと今迄的組織の個人店を徳のら移ばうこん道理もあつて、商事実をこのもあつる。

○本年洋紫木がどんなに安つたことを見ると就てサツト調べると二百三四十円高くなる、幾人と一日おきに一冊位の収穫があつたことを聞く。物論輸入のものも交つてゐるが多く

八字せんれいとゞめる。續刊のこゝが可ようあるから、分くから
毎月極つて字をせくる、富山房の百科事典、北の和医御
風の隨筆、全集、の、夏人、事、字の大トんストイ
全集、の　　の新芸集成、自の沈降字、のが
毎月配本のもの、自分関係の色彩から近刊を書セて
きこゝろ、友人から広告を示さんから、此話を頼まんも
送本を書ケなくしれるものが相南をあつて、自著を改
版したるも又莫千冊かハつもあるから、早大の出版部と
文化堂から、或る時代を供給者ひあつたが近年
同じ刊行を手指くしあるうゝ、一向を供給がないから
ちゝ焼き入つて読書をする閑暇がないから同じの
字数とはいつも表ひあるが、さて世ひ本まの者)京の

複原製

ものハ無くこゝかるん。
自分の時代は、自分い好う方ひとも
世ちひ方ひあるから、格別苦情もなへ。地分各所から
思ひくる結ることが別来る。白米がくる餅米がくる
野菜がくる、漬物がくる、魚の塩引が販売かくも他
所からも送本もくる果物がくる、いろ〳〵の酒が来る貧
厨の大いる張ふのハ地時ひあふ自分の力もたぶのハ
好下物を字のもまること、仏壇の鶏南蛮
を字のもまり或ることの清酒の肴の豆ち
らし生の牡蠣や鱶ることが半ってくるこん苦の豆ち
る晩ひ役立つのも自分ハ有(無欲)するが、ありま
輪湯すること、雨除こ困しる、又大晩こ迫ること家分ん

金剛場陀羅尼經學習法 (1)

野本白雲

この經は所謂白鳳經である。我國に現存する古寫經中尤も古いもの丶一つである。支那の寫經では明かに六朝時代の年號の存するものもあるが、爰にはこれを論ぜぬこと丶する。

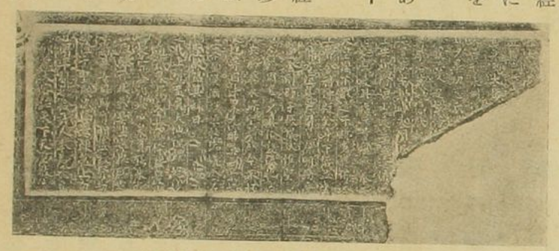
書道上この經の貴い處は書が極めて好いことである。寫經の書風は所謂寫經風であつて何れを見ても千遍一律である。然るにこれは歐陽通の書風であつて、或はその眞蹟ではないかと疑はれるほどである。寫經中にかゝる書風を見出すことは極めて稀なことで、珍とするに足るのである。高野山に金光明最勝王經と云ふがあつて、これが晩唐の柳公權の書風であるが、これを天下の雙璧と稱しても差支ないであらう。

この經には最後に次の跋が認められてあつて、書寫された年代と、筆者とを明かにしてゐることは、貴いことである。

歳次丙戌年五月。川内國志貴評内知識爲三七世父母及一切衆生。敬造金剛場陀羅尼經一部。藉此善因。往生淨土。終成正覺。

敎化僧寶林

丙戌の年五月は天武天皇の十四年である。七月廿五日には建元して朱鳥と云ふが、それ以前は天皇の御宇は白鳳である。跋文中の川内國志貴評内の「評」の字がこの經の年代推定に極めて大切である。評とは朝鮮の行政區劃であつて、我國に於てもそれに倣つて郡を評としたことがある。その例は二つあつて何れも白鳳時代の金石文に存する。卽ち其一は那須國造碑と他は大和の法金剛院の鍾銘であつて、ともに郡とあるべき處に評とある。



長谷寺法華説相銅板

更に白鳳時代の建立に係る大和の長谷寺に、我國金石中にあつて著名な法華説相圖がある。これは世に千佛塔と稱せられるが、その臺座の銅板に刻された文字がこの經の書と全く同じで、同一人の書と見られるのである。然もその文中に「歳次降婁柔兎上旬」の語が

横原製

賀知章墓

長舌は上の敏字から全を受けて頭で曲げ切って廻して頭く頭で曲げ切って廻して頭く頭で廻って廻って廻って

降婁とは戌、漆菟とは七月であるから、この經が書寫されてから二た月後に書かれたものである。白鳳も七月廿五日に朱鳥とされたが、七月の上旬ではこの刻銘も白鳳時代のものとなる。金石家はこの臺座の銘文は長谷寺法華說相銅板と云つてゐる。上で年代の考證は一と通り判つたことにする。敎化僧寶林とは筆者であるが、其の何人なるかは明かにし難い。恐らく當時支那歸化僧の書をよくした隨一であらう。この經は市島春城先生が早稻田大學圖書館長時代、下谷池の端の琳瑯閣から掘り出したもので、氏から今は故人になつた京都の小川簡堂氏に贈られ、その遺族のものである。その學び方に就ては次號よりする。

賀知章草書孝經學習法 (7)

鈴木雲洞

起筆は上の敬字からの筆を受け強く入り、少しく右に上げ（1、以下圖版參照）の使轉の筆は兎角輕率に弱くなり易い處心をいれて強く強く腕で曲げ切つて廻して行く積りで、堅筆に移る場合も同樣グツと突込んで終筆迄氣力をゆるめず中心を失はぬ樣、又終筆は（2）の如く賀知章獨得の妙筆に變化縱橫に注意。

前にも同字があつたが今度の字は一層流麗に偏より旁の方を幾分細く輕い筆で上にあげて下部は旁の方が右上りになつて居る、偏は左左と形を取り、旁は逆に右に右にと氣分を行かしたものの樣（3）に見える、然し調和と中心は失はぬ。

起筆を思ひ切つて下げその儘の調子で最後の（4）で全體を引締め、大きい氣分で遒美峻勁。

親 前字同樣の心持ちで差支ないと思ふが、圓勁快暢の點は勝つて居る。

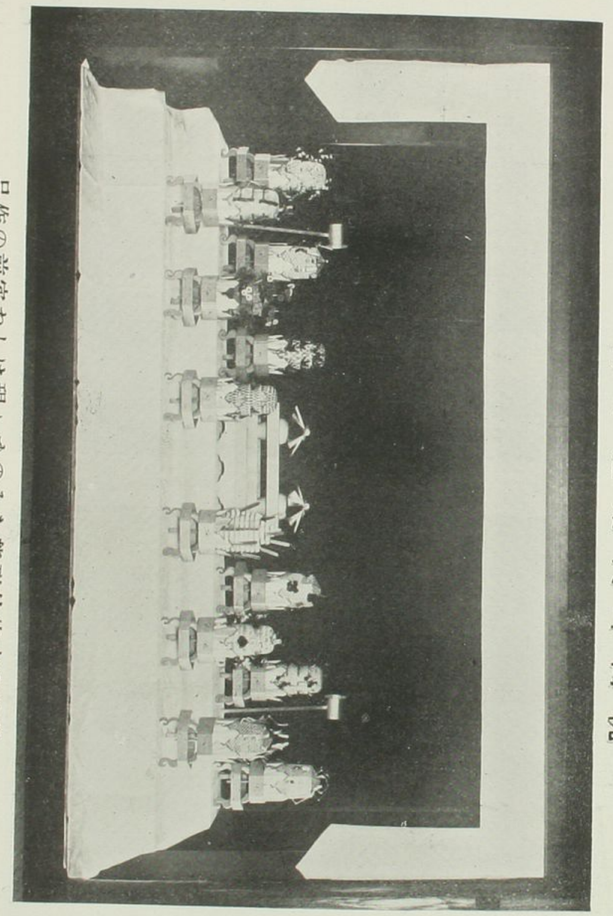
而 起筆輕快駑くべき巧妙、次筆との間は廣く曲折使轉は狹く調和を取り、終筆の二點は同じ向にならぬ樣。

德 偏の彳は散水の樣に見ゆるが消えたもので普通草體（5）の通りで、旁の方が總體から見て大きく見えるから偏に十分筆力を付け、又旁の竪畫は偏の竪畫の如く左に筆の鋒をあてずに逆に右に筆の鋒をあて、左は腹毫で書き、二點は小さく强く、終筆は太目にグツと突立てて上右にぬく、下げるとだれ體を失ふ。

敎 何んと自在な筆でせう、人の腕で書いたものでなく機械類のもので廻轉された樣な筆路、流美暢達而も勁健、左から起筆偏、旁

考とするべきことまで、一々墓の写真と共人の書[illegible]
めてある。
○自分の今度出版する随筆に「紐上藝術」の一節を
載せた、クラヒトンの新意●も言及したが、東京ひと
頃流行の調度品である「醍醐」と云ふ料理屋主山下
茂と云ふ四條流五井春汐の二人が、往年クラヒトン
氏の料理を中心に桃山時代の料理とかいふ
其の高雅な品位の料理の盛り方の一端が図
らずもあらはれた、これを因として盛り方の作法があつ
て、茶道術的になることが偲ばれたる茶人の考へ切りぬ
きをおもふ。

部一の飾床禮婚代時山桃



第六回日本料理展出品
桃山時代調料理醍醐主人
山下茂（三越に於て）

醍醐の床飾にて御婚禮用式を御挙げして頂きます際は

品作の前姿たしは現いまのそを態形的格本の時當

考とうるべきこと、一と巻の写真と共人の書

めてある。

○自分の今迄出版する随筆に「廻上藝術」の一冊と

載せた、クラミナンの新意○うも言及したが、東京ひり」

吸涼所の間庭にある、醍醐」と云ふ料理屋主山下

氏と云ふ四條流本井春次郎の料理士やうこと力

ルの料理をやる中に、桃山時代の料理士やうとかい

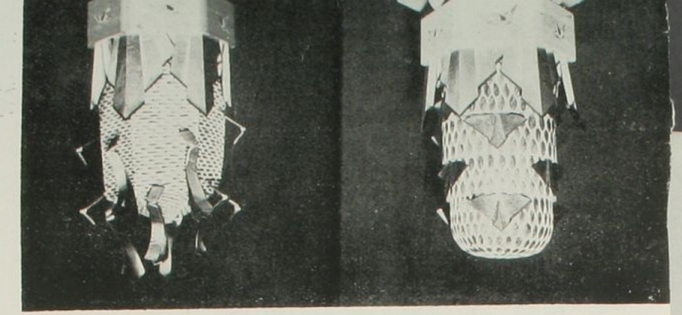
女の高四位の高位の料理の盛りこめ一端が図

とうてある、こんな図を盛り方も往年の作法がある

と、茶術的であることが思べられる、左の巻の切り

きをあらはす。

複原製



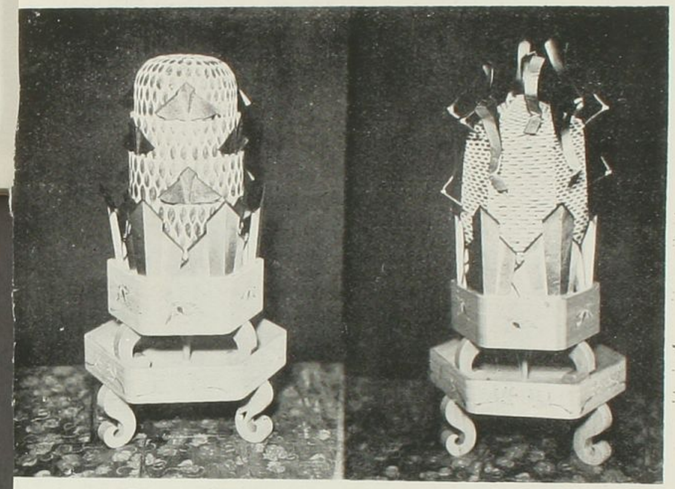
部一の飾床禮婚式時山桃

第六回日本料理展出品

桃山時代婚禮床飾の一部

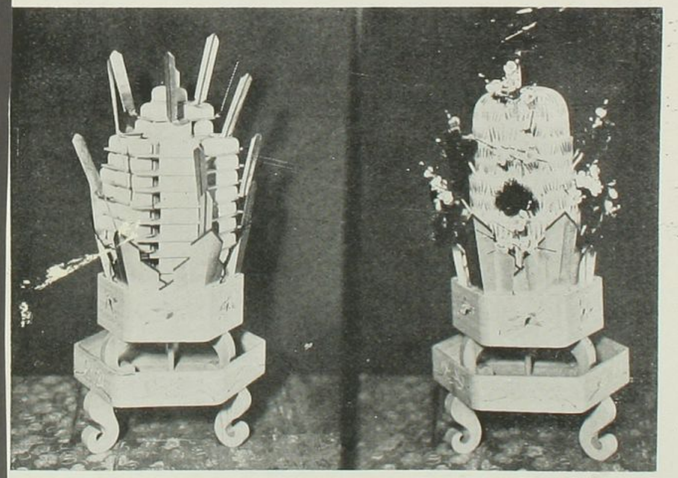
第六回日本料理展出品（三越に於て）

大日本料理研究會師範　山下茂



亀足塩引盛

鯛盛



若松白梅

蒲鉾盛

○近来各所のビルデングあり、創意の設備があつて、無多を設めとあるも、多くハ椅子テーブルに簡易なるのを室内に注かつてあるが、客室を連ねて飲食をするハ簡易すぎる。普通の料理屋も其の考めを倣うて客を待つやうな仕組なれば、表にビルデングでも日本流あり式の設備をやり、椅子テーブル式の飲食場のみを小座敷を化ることが行はれ、別々の休憩室を化ることの如きハ二階建ハ小住宅がり、近頃下町にも二三の小住宅を化つた。京橋の三福や米相店地下の休憩室を多く化つてゐる。浅草公園に東台下の聚楽出でハ或ハ二階建ハ全部小住宅を設け、一軒屋の村松町にもあるが如く設備されてある。吉庵ハ初めて日比谷の美松といふに入つて来た。これのデパートよりも

標原製

建てられビルデングも本城内に設備と表に出るが、階下ハ椅子テーブルの洋式で、時代を移して般旅館屋敷住宅とうつて岩り上ると全部日本式もあり、東海道五十三駅とかに、中央に新橋の高輪、高輪川、天王川、京士川などの杭が立つて居り、各宿場名が附てゐるもの、自分共の陣ゐられた所ハ最も極端の古めかしいが京都に近ければ、高又口さい何もを駄ぬきがあり、京の祭迄も統日本式で床の間もあり、悔も掛けてあり、普通の料理屋と変らぬ所がなく、長谷川の設備があるとおもふ。

華清池

小佐井清平

現今世界の耳目を聳てつゝある西安事變の根據地たる西安の地は支那五千年の歴史中、最高の文化を建設したる大唐の都、長安である。しかも三皇五帝以來、無數の榮枯盛衰中、最も傑出したる鴻邦、李瀘等と匹儔する禮の將介石が、張學良の餌に釣られて權花一場の夢と化したのも、玄宗皇帝の離宮華清宮跡であるとは、誠に奇しき運命である。ただ不軌の黄口兒學良が、太原より起つた隋を討ち、長安に入つて禪りを受けた唐公を學ばんとするならば、禍亂の源これより發だしきはあるまい。

黎の始皇が初めて麗山の麓に溫泉を發見し、ここに石を疊んで溫泉場を作つた。漢の武帝はそれを更に擴張し、完備した。その後、唐の太宗に至つて、この溫泉を中心に離宮を建營して溫泉宮と稱した。玄宗皇帝はこの地を最もよく愛し、大々的な溫泉を拵へて所謂華清池となし、華麗莊嚴な華清宮を造つた。東に開陽門、西に望京門、南に昭陽門、北に溫陽門を繞らし、その中に瑤光殿、飛霜殿、九龍殿、宜春亭、朝元閣、長生殿、老君殿、芙蓉風閣等を造營した。金銀の柱、珠玉の階、誠に燦爛として輝き亘つた。

玄宗は紀元十月から長安の都まで、楊貴妃を擁してこの華清宮に滯在、冬爽を知らぬといふ溫泉の上に舟を浮べ、その中に貴妃と共に乘つた。楊貴妃は所謂閨の秋色に浸からざるものがあつた。

杜甫は華清宮の詩を賦していふ

東望蒙山十六程
驪宮和月到華清
朝元閣上西風急
都入柳楊竹雨聲

天寶十四年十一月、玄宗はこの楊貴妃が紅顏薄命なる宴遊の最中、安祿山が謀反の大軍を率ゐて潼關を打出で、都に迫つてゐるといふ早馬續りに告げ來るのを聞いた。

潼關はや破れて、都危くなるや玄宗は蜀に臨幸を決意。その途中、にて宰相楊忠國は味方に殺され、更に高力士などの讒言にて楊貴妃の美人の末路眞に憐むべしである。玄宗は『烏啼き、花落ち、水繞に山青し』と嘆しと雖も、わが愛しみ敗ずる時に三十八歳。

楊貴妃の兄楊國忠と、實力派の安祿山とが勢力を爭つた結果、玄宗の大唐は太湖亂を引起し、盤根錯節の苦しみを受け、社稷紅塵の危急を告げたのであつた。

今日の狀態は諸外國の勢力が錯綜してゐるから、極めて複雜を極めてはゐるが、根本の主要原因は古今東西を問はず、人間の感情利害に負ふところが多いであらう。楊國忠と安祿山との抗爭は、また將介石と張學良との爭時である。しかも國忠殺されて、祿山敗れるの儚によつて、將介石囚れて學良榮ゆるの理があらうか。況んや學良は詐謀當なき狗鼠の徒に過ぎないではないか。

玄宗皇帝は一時蜀に遁れられ、祿山亡んで漸く天下靜穩になるに及んで、再び都に歸られたが、その時分の詩に

幸蜀西至劍門　玄宗皇帝

劍閣橫天峻、鑾輿出狩回
翠屏千仞合、丹嶂九丁開
潼水流旋轉、仙雲繞馬來
乘時方在德、聖術勒銘才

時に乘じて天下を治めるには、何より德義が大切だ。時の變は、天の運である。天の運は道によつて開拓される。道義を以て勝ちを制するものこそ眞の英雄だ。この眞理は今も昔も變らない。

無論、時の變は、規矩準繩を以て律することは出來ない。特に支那のやうな崎嶇險難な國では一層むづかしい。この機に臨んで、萬死に一生を得て、將介石よく鐵門に至ることが出來るかどうか。たとへ鐵門に至つても、時に乘じて德義を以て再び天下に臨むことが出來るかどうか。恐らく何れも不可能であらう。

麗山の麓、華清宮は跡方なく消えて、溫泉のみは昔ながらに湧き出てゐるであらうが、將介石は恐らく再び華清池に浴することは出來なからう。

標原製

學園　一一點灯者の歌

新年號に相應しく長壽を祝つて—萬延元年生れ、半世紀の早稻田を眺めてきた學園の二長老、高田、市島兩先生へカメラ訪問

ひとしきり正午のサイレンが響き終つた後は又もとの深いしじまに落ちてゆく前總長高田早苗氏の駒込の邸宅——冬に備へて奇麗に刈りこまれた前庭のおしめりの行届いた小石の上に不羈者の儘下り立たれた先生は「ネ、の具合はいいかね」とカメラの前で頬を崩して微笑せられる好々爺である、二十三の年から五十余年間學園に捧げられた先生は今年七十八回目の新年を迎へ、益々壯健たるものがあり、腦裡を去來する思ひとては只我が學園あるのみである

將來早稻田出身者が日本否世界を動かすに至るほどの勢力を造り上げる日を心秘かに楽しみにして余生を送つて居られる老先生の『後に來るものへ』の座右は年が改まると共に益々堅固になつてゆくのである

【寫眞上高田先生】

◇

漫言

春城生

東五軒町の自邸で悠々自適の生活を讀書と趣味とに送られる市島翁は寫眞に應じて次の感想を本紙に寄せて下さつた

過日高田博士の招きで國府津の博士の別莊に舊政友數人が會した。其人々は尾崎行雄、加藤政之助、大竹貫一の三氏と主人と自分を合せて五人であつた。西藤久意氏も招かれたが病氣のため欠席された。此會には一同打寛ろいで四十余年前の舊を語り、おもしろくもありおかしくもあり、種々手厚な御馳走もあつて愉快であつた。

記念寫眞も撮つたが、それに書き記すとて年齢調べをやつて見ると、加藤氏が八十三で最年長、其次尾崎氏が七十八歳、殘る三人が同年であるが、愈々生れた月日を調べて見ると、自分が最年長で他の二氏より一ヶ月ばかり早く生れ、其次が大竹氏で高田氏は大竹氏よりも二日おそく生れて最年少であることが知れ、博士は矢張若返つて氣炎を吐かれたが、五人の年を合算すると三百九十餘歳になるので、五人がかりでやつと武田信玄の年になるといふて一笑した。

もう十數日經れば又一歳を重ねるので、有り難くもないが已むを得むを得ない、唯々孫々年を重ねることが若い人々に對して恥入る次第である。

【寫眞下市島先生】

○東京のごとき大都会に於て久しいこと多衆を会する会館が無つた。近年のことを半大でもある大隈侯爵邸のやうなものを有するものはあつたが、それとても大限定員の設備を出来たものだ。志度在世中多衆を会する時のいつも中校庭にテントを張つて大会を開きやの歌舞をもつてしめたものだ。日比谷の会堂もいと出来てからまだ僅かの月日を経ない。お粗末ながら当会の唯一の大会場であつた内幸町の日本橋会社が洲崎の新築から本社を東京へ移した際から多くの技家の会を催すべき私設の相撲があつたが、当会は三月間の予定であつたが、当会の会場があるまでの間、自分が出場

横原製

安売出しにされた。国技館ひとつの。実の文化社会を大い今場の都らを無つたが、さて社会を利用するよう家今場の利用するあの絶対無つた、三月間もかけてもらいと言う、国技館ことを知るべしと自分の主張したが必ずしもそれを従つたが、えらい大成功で都会人をアウト云いし、四食の会社が初めて都会人の顔を出したことをすると、時の軽便の眼を見ることの出たのだ、皆驚歎した中心高美度さがあれば中を仕切つて式場も国家会場に立派なものとなつた。自分の内部の装飾を共にしたが、会社を伊藤まとい趣味家がみて、巧みを極めの点をやり得

葬式場を造る。その仕切り、天井まくを造り、幕を吊り
下げ、中へ入ると四枚敷を眼想せしめる仕掛
無つたやうに、よく変形したもの。今迄の一層引立つた
実に当時大きな人気場が無つたので、新聞社が乗出した案
といふが、なるほどこんな新案の集合史上神せ一例で、
自分の西洋流りそうなる。
自分の生涯に大きな事業を任意したのは次上のものに大限を
為の国民葬がある。日比谷の公園に居くに為る。葬儀
を先ずはいま人の死の国民葬が初めてあらう。自分は
三度御大葬に則ち任験があるのに向て乗をしめ取つ
たのがある。葬場殿と大乗を西洋吐する西洋を左右る
心のたるいを、御大葬の型を作つたもの。堀舎が付

複原製

が心ならずの死が、三十歳の大乗が少しも認雑なる様子三
時間のみ私稗に終のみの、春吐の四面路が軍さを得れ
かられと自分の時を待を抱のもの。
○私方く此の一年間毎月例らも二三回花を持て来つて
送ることがある。花い事に対ようさまくに和洋とも拵る
が、そうく三流を先び、値は一二円乃至三円位するものがある。
此の値りの新しい推んうとして(此)書が有る。自分の印面の
生涯が自分のものの藏故があるのに、自分の飾り交り
のうちにまひがある。此方は大曲りの横濱の花を今此の話
りの交書に勧飾をまつる。自分まで今此が花を乗るを情
まみ、交書は無條件にて辞つてゐるのを、自分方へ老すの
があるから、自分のもの仕合を得も

のみ。実に大曲の花屋から寒菊を持ってこられたが、見ハ年
を一二月あたりとして、北の花屋の附近をあるくとハこゝ、自分
の家を格別交渉のあるでもないが、北巡査の格別しん
切と四季さまくの北花屋の花が私の床を飾つてゐる。
自分の北の巡査を見ては、使者と名づけもみるとゝ
も雪の降るまで、年相美ごとの紅白の薔薇を深山に
ち来つた。

十二月二十二日

○近頃田の高浜虚子氏、「紅葉黄花秋
氣高し」と一句を神戸にしたことがあ
る、春の句を考へてゐたのだ、俳句中
一二の句を考へたが、「生き春」といふ
件すおのづから思ひつく。春の句ひとつ。

○紅葉黄花秋氣高し」の句を思ひ出して、九月春の景
おもく相違ないが、殺り殺り骨ぬ仮味がうすいと、
終に春の箱根を不自由「格」がやゝよくと考へてや
つた。

十月廿六

○大阪の美術新報社と曼公作家と署した大
の帳が来たが、こんな現代の名家の色書がな
めて、曼公の一代を語る紀念物だ。自分も嬉し
い。「雄現鎮圓」と布袋尊を二枚
を立つたが、後者がなめてある。「神者二枚
二十五四の高所をとゝ」の「神者」の附帯のもの
相かつきて飽きも大阪式であるのだ、二章の未窓と愛
無味乾燥なり。

○自分の待人を無取扱、義俠の志を持ふを厭ふ
ものゝ多きを嘆ずるが、自分の玄関の入口に墓石が
堆積をなしてゐる。常に聞かうの門の表側の不潔が
甚くうるさくてたまらぬ。よくこゝを通ることもあるが
のに、自分も昨日か気をつけた。別在羅とこゝが、自分は
拾ふ為に、つゐ前方をうろつく始末だが、墓石が無
茂する程不器量な気持ちはない。矢張り公か来て拾ひ
とるのを困りとるのだが、志ある人と交りが薄くなれば
前と苦がおすまるべし。人と苦があり、所謂人間の
多くの志を慮るべきの常なる石の如く苦が生ずる暇
がなくなるが、玄関も段々閑散となると人間も老
衰しまふ苦がなくなる。玄関の苦も早速掃つてテト

人交りに注意を拂ひ給へとのまゝ。

十二月廿一日記

○俳句雑感

記を出版せんとの計画があるも、柳田氏が編輯を
担任し其稿成るに、無線を失し遂に遅延の為、出版
期早晩成り立ち、稿本として存在することゝなる。出版
は他日を待つことゝなるべし。義を幸ひに三田長と
欲命し得る出版物が見出されるに八京都大学の
も於ける過去の随筆者が其幸にして俳句過去の
文芸年表である。これへ五百頁に渡るもの、著者
積かく出版せんとす。紙型も取扱ふ為に、寺院が
つゐに、俳者の共心の画伯を帰山せし中
受け出版するこゝとなるべしと、無條件にて中
の社会に俳者の

大いに満足したるが、此方が早稲田の頃から手伝ひ墓されたことを自分に寄り表んでおる。遠藤の未亡人に三田岳こあり特別関係の人と行き紀念碑を建てんと計画されたが、今田氏も存命中遠藤の銅像を作らせられたいと提議したのであるが可とされ、今田の心つれ原型を作り一部出来たが、却て出来ぬ故、常に故人を思ひ墓碑の図を考へあらう。尚ほ未亡人の好び、計画中の墓碑に命名成つた。これは早大の相山公園を田氏が小の自然石を双竹会園中の柿樹の下に建て、遠藤の墓碑等も会いを遠藤二千本許を石匠に依頼埋めた。百年の後園が荒廃するのを惜しもこれのみい長く存

複原制

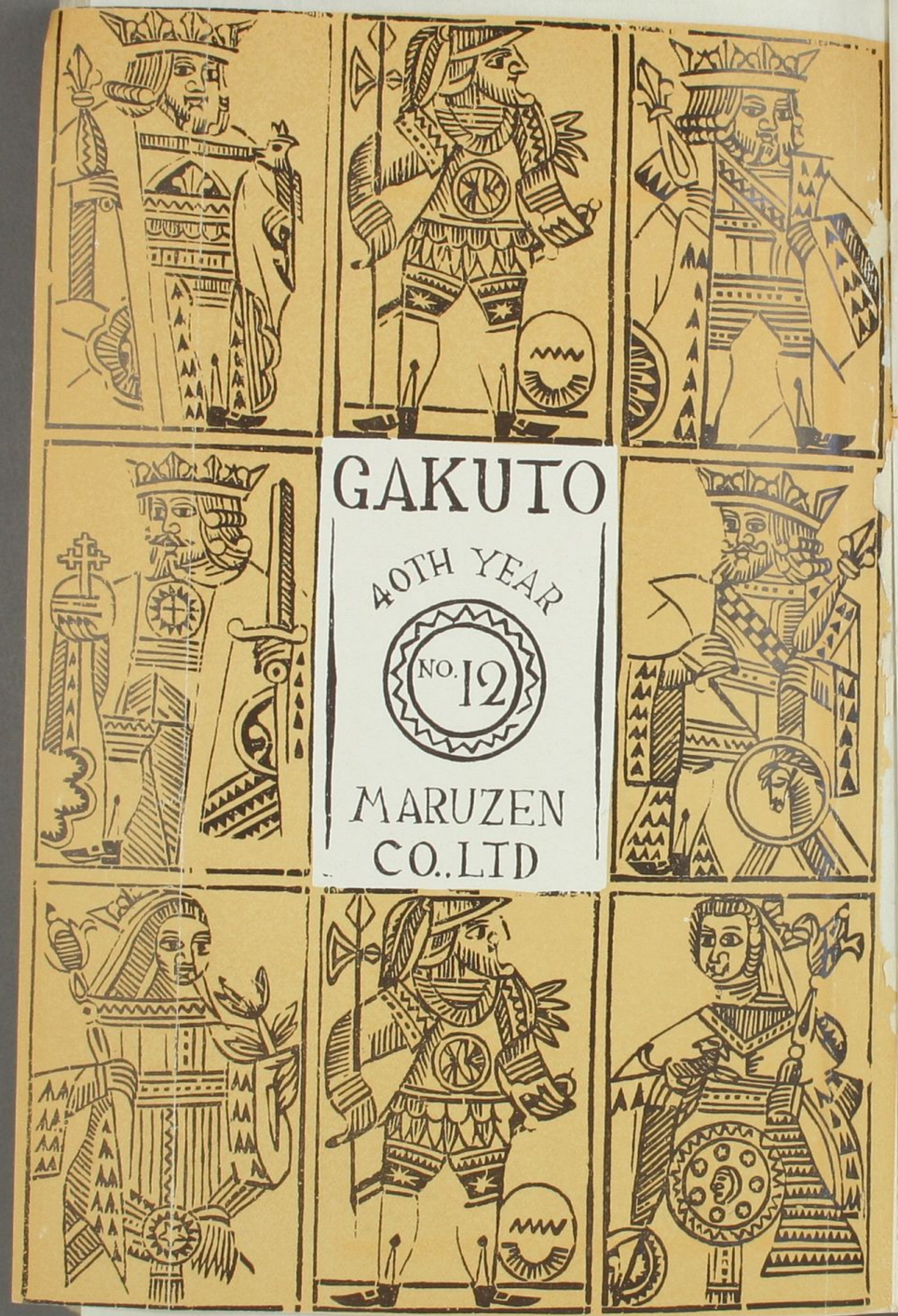
まるであらう。三田岳まで墓碑を提供と行こうと

十二月廿二日記

ことをきめたのである。

○近刊十二月号の芸術の表紙にトランプの絵がある。要節柄一寸よい思ひつきだ。書和風にけれ、トランプ研究者の著書の内から絵を採つたのである。その著者の名前は模様もあるが、古風の俳句のの板味もある。

○不動まんが若をもじりうへ、春つの人口が四角の人を比しても美しいのは、よく動くからである。なるへ前を新しいからうえ新で聯想する俳句がある。ちなる著名の俳人が、就中ある俳客と言ひて見ると生憎主人第字であつたが、細長氣と利かれた主人



の咲くを待てと引留めて寢ようとすれば、細長いしかけ
寢て仕まへと、俳句を作りやすく、風雨に腐を納め
て、蚊帳の中の女をのぞくと、白般を着ること
無嘯しもあるのかい、変な心がおちり、一寸觸れも
えると、女嘯を覚まして、ちゃうと嵐が起り、俳句
七日船にて、一句をもきき残して深夜にうつる
立ちへに其句を云く、

動かぬ石ぬ石ぬ山の雲

吟呼と人動くと石ぬ山の雲。吟こ、
口愛人を殺した其の陽茎を抱擁した妖婦お定い
一時世人の評判を惹した其の判決を待つ日一日が
彼女の変態性慾家であるか、動かぬ狂人であるか、判

横原製

決書を懸ること深く、の生活をつけ加えるべきが、其の殺
人の行為は、愛人を獨占したさの為に出でし、敢て死を
惜むにあたらず、殊勝のものなりと云いんばかりに、寧ろ純
真の愛を認めらるべき判決で、捨てるが十年求刑し
なる義に判決を言渡したるは、斯る難きの
場合に於ては、愛を入るるものなることを
と明白なるのに不倫であるが、美貌がシンプソン夫人
と別れ出家、あの女と一緒に長く心中務が成んや
とまで動揺する中、言渡した退位を決断したのは、或は純
真の愛の表露と言あるべきかも知れないが、世の識論
家はお金目当ての結婚は論外であるべきものの真味
あることに、動揺に同情を寄せるのは、法廷で

Playing Card of Various Ages and Countries

Selected from the Collection of **Lady Charlotte Schreiber**

3 vols. 38×51 cm., half morocco bound, gilt edges. London, 1892–95

Vol I. English and Scottish, Dutch and Flemish. 144 Plates and 14 Pages of Descriptions.
Vol II. French and German. 154 Plates and 20 Pages of Descriptions.
Vol III. Swissh, Swedis Russian, Polish, Italian, Spanish and Portuguess, together with a Supplement of Other Countries. 150 Plates and 29 Pages of Descriptions.

￥275.00 要別送料

我國でトランプと稱するカードは元來東洋から歐羅巴に輸入せられたと云ふ。而して傳來の時代及國民性の異るにつれ　その紙牌數及圖樣には夫々特徴あるものを生成せしめてゐる。本書は斯界の蒐集家として著名なシユライバア夫人の代表的逸品を時代、各國別に蒐めて實物に近く複現せるもの。カード愛好者の垂涎値はざるものにして、他面風俗資料として雄なるもの。

（表紙はフランスの木版刷りカード）

Old and Curious Playing Cards

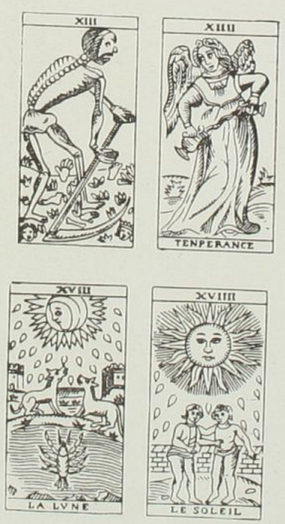
Their History and Types from Many Countries and Periods

With 235 Figures, Some in Colour
19×24.5 cm., 235 Pages

By **H. T. Morley**

￥17.20 〒 .22

Playing Cards *History of the Pack and Explanations of Its Many Secrets*



By **W. G. Benham**

With 242 Illustrations, Some in Colour.
19×24.5 cm., vii, 195 pages

￥7.50 〒 .22

カードの由來名稱の起原　カードに祕められた物語等々趣味多き話柄を收む。

A History of Playing Cards and Bibliography of Cards and Gaming

By **C. P. Hargrave**

With about 300 Illustrations, Some in Colour. 23×30.5 cm., xxiv, 468 Pages

特價 **￥60.00** 〒 .46

世界に於けるカードの歴史及現狀を叙述するもの。日本及支那から印度　佛蘭西、獨逸　白耳義、和蘭、英國、伊太利、西班牙、瑞西　丁抹、瑞典、露西亞　亞米利加に亘り　多くの挿圖を收め興味深く讀ませ、之にカード及競技の文獻を附す。

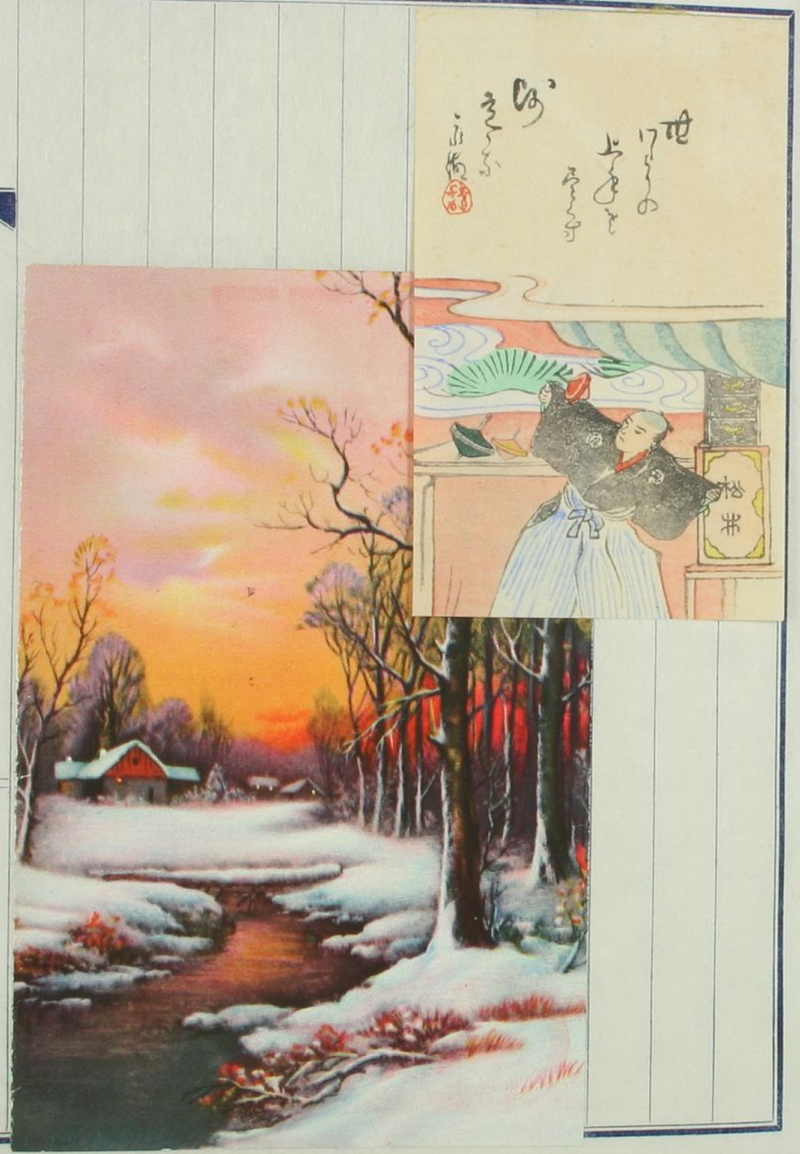
いろはとあるなど一般、六年の刑を被る日皇帝の位を退くなどもはるかに軽いのに、何故日退位の皇帝を世界の四位からいのかと、来西のコーテンスを対照して無味を感ずる。

十二月廿二の記

○地方の方言にベッチョーとあるが、女陰をさし、或い交接の意味もつ、但深のヘやしるも有り、新潟辺からあちらこちらの用いらるが、多摩原は全く知らぬ。柏崎の関甲子橋の紙屋の婦人、或るやんごとなき方が寺泊に御滞の時大婦人別帳（ようり）を寝ると仰つれども如何なるものか或い文寺泊の庄が貴淫しを共数人と別帳をつけれから始まつたなどと言ふ。高志路の記もあるべし。

○昨夜（十二月廿三）安田某氏外数人と来訪、種々話ありし、保某氏の人こち人は多く拙者の知る、特別の事なし。

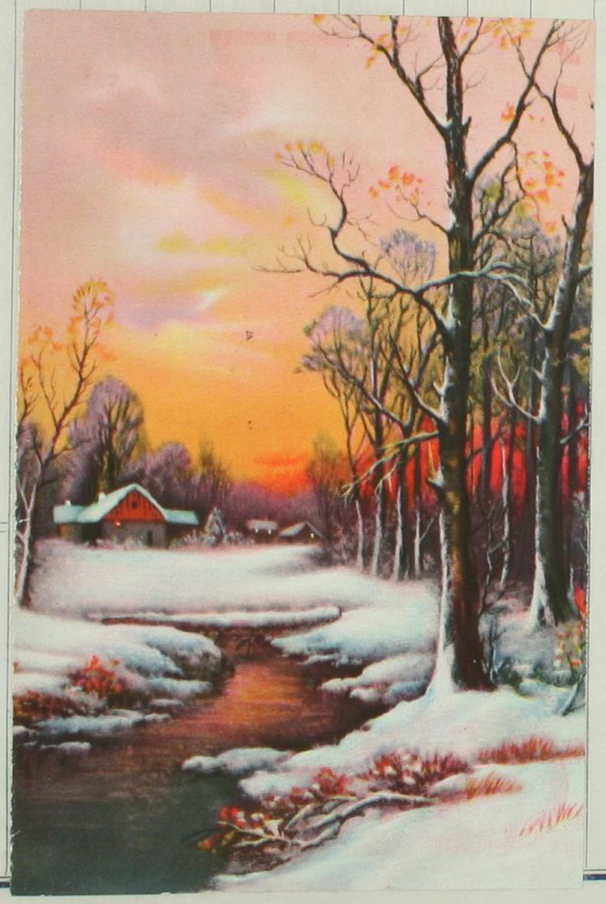
三十六の美男子、酒池肉林の話といろ〳〵変き後ら先代の平生を就て見ひる話ある、伯爵の大リンピックも英皇帝の事に就てロンドン新聞に載る保利がある。外太利ばかりなれば及ばれるに後る。此人酒を飲まぬ、ミュンヘンの麦酒ばかりはうまいかつれと言へば、麦出地にて飲まぬまいなどと言へてゐた。先代は酒豪なりしが、下物はスルメ、炙数、炙り豆などの安いものを始めとし、晩年は大概堅いものを始めとしてくらす。桂庵にて、森度義、南楚再



三十四　榕亭歿後の福井家

「一醫師の藥禮又は看料などの高料になりたるは、平安元誓願寺黒門の福井丹波守より始るとぞ。此人初めは一僕にて歩行せられしが、段々と立身して禁裏御典藥に相成、家門多く、家作など都で唐まなびの作り方にて、皆チャン塗ビイドロなど所々に有之、三階作りにて、能舞臺有之、御堂上方御招請申上能興行有之、甚驕奢なりし。長命にて、遠國病人など業々京師へ來、又は飛脚にて藥を申請ること誠に夥し。且又新渡の唐本類は長崎へ人を遣し、高金を出し買求む。珍器等夥く、土藏八ケ所計有之、先年丹波守□□□歳にて死去後、弟は山本安房守と申別宅、實子は弱年にて御典醫となりたるに、不幸にして先帝の時藥を誤り、是よりして御所表は勿論田舍迄も聞傳へ、藥を請ものなし。依て年々難儀（に）および、唐書畫又は唐本珍器等追々賣拂被申候へ共、未だ夥敷有之、二三代は是にて相續も出來可申趣に風聞有之候處、天なる哉嘉永七寅年四月六日午刻御所舊院御臺所より出火、禁中御炎上（に）および一條殿此外市中え飛火、聚樂西陣等數百町類燒の時、福井氏土藏燒失五箇所有之、書畫書籍珍器悉く燒亡せり。實におしむに堪たり。」（第四十六冊）

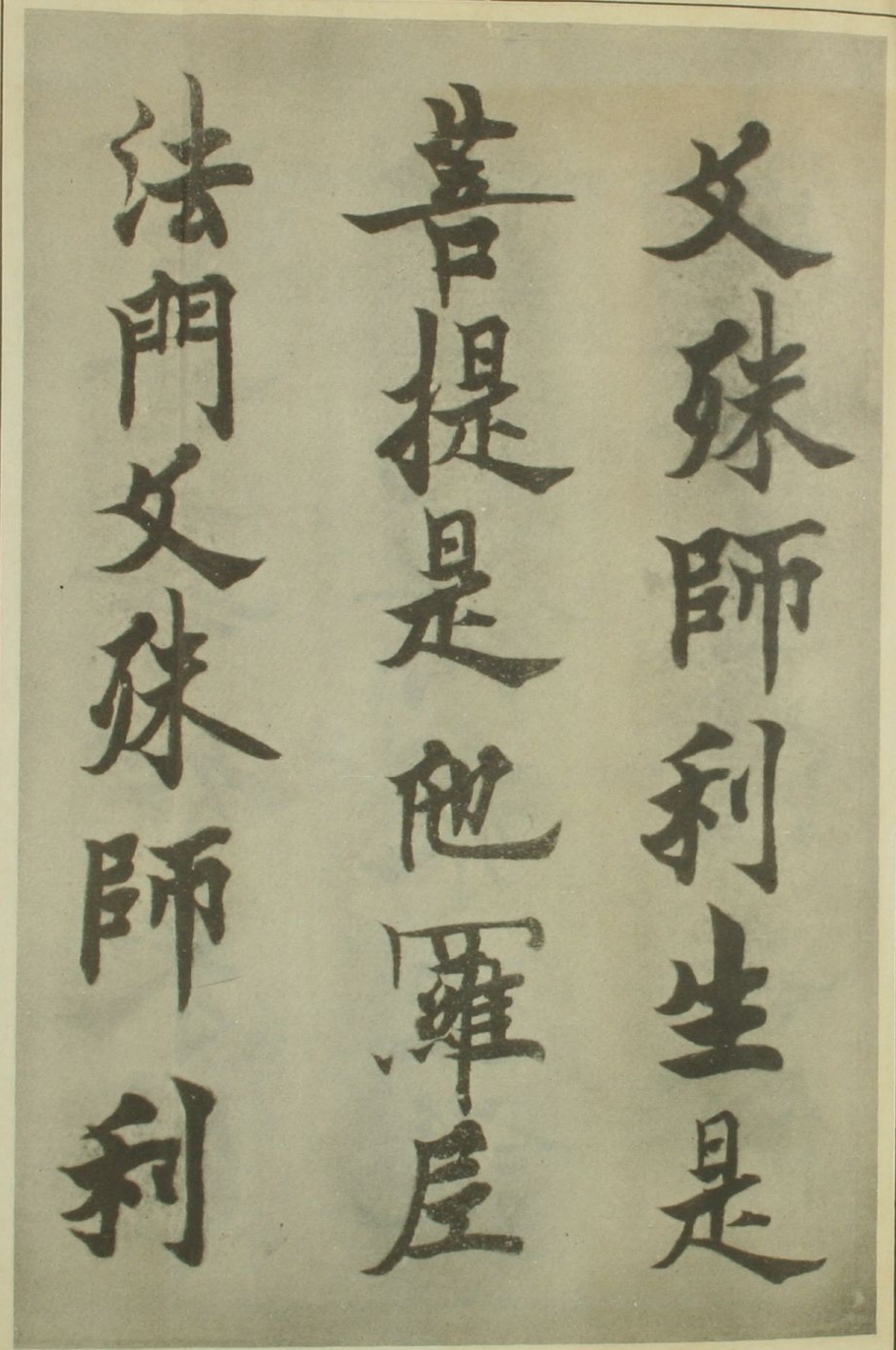
福井家の大層な樣子は、狩谷棭齋の伊澤蘭軒に宛てた書簡の中に記されてゐるものがある。この記載はそれと對照すべきである。



三十四　榕亭歿後の福井家

「一醫師の藥禮又は肴料などの高料になりたるは、平安元誓願寺黒門の福井丹波守より始るとぞ。此人初めは一僕にて歩行せられしが、段々と立身して禁裏御典藥に相成、家門多く、家作など都で唐まなびの作り方にて、皆チャン塗ビイドロなど所々に有之、三階作りにて、能舞臺有之、御堂上方御招請申上能興行有之、甚驕奢なりし。長命にて、遠國病人など業々京師へ來、又は飛脚にて藥を申請ること誠に夥し。且又新渡の唐本類は長崎へ人を遣し、高金を出し買求む。珍器等夥く、土藏八ケ所計有之、先年丹波守□□□歳にて死去後、弟は山本安房守と申別宅、實子は弱年にて御典醫となりたるに、不幸にして先帝の時藥を誤り、是よりして御所表は勿論田舍迄も聞傳へ、藥を請ものなし。依て年々難儀（に）および、唐書畫又は唐本珍器等追々賣拂被申候へ共、未だ夥敷有之、二三代は是にて相續も出來可申趣に風聞有之候處、天なる哉嘉永七寅年四月六日午刻御所舊院御臺所より出火、禁中御炎上（に）および一條殿此外市中え飛火、聚樂西陣等數百町類燒の時、福井氏土藏燒失五箇所有之、書畫書籍珍器悉く燒亡せり。實におしむに堪たり。」（第四十六冊）

福井家の大層な樣子は、狩谷棭齋の伊澤蘭軒に宛てた書簡の中に記されてゐるものがある。この記載はそれと對照すべきである。



國寶　寶林・金剛場陁羅尼經（縮大）

小川尙爾齋藏

店頭の國寶

市島春城

先日東京朝日にも話したが、野本白雲君から貸して貰ひたいといつて來た架藏のコロタイプ版の金剛場陁羅尼經（註1前號より掲載）の原本については古い話だが一つの思ひ出がある。

二十年ばかり前に古本などを漁つてゐる時に、池の端の古本屋から寫經を一卷買つて來た。別段掘出し物といふやうな氣持で買つた譯でもないが、卷首に金剛場陁羅尼經とあつて、卷末に天平何年とか書いた符箋がついてゐた。天平時代の寫經の文字は、一般に書體が柔いのが普通だが、これは著しく剛い文字で書いてある。珍らしいお經だと思つたのでともかくなにがしかの金をおいて買ひ求めて來た。歸つてからまた氣を付けてよく見ると、卷尾の金剛場陁羅尼經卷一とある次に、識語と願主の名がある。

歲次丙戌年五月川內國志貴評內知識爲七世父母及一切衆生敬造金剛場陁羅尼經一部藉此善因往生淨土終成正覺　敎化僧寶林

年號が書いてないし、志貴郡とあるべきところへ志貴評といふ字を使つてある、異風なものだとは思つたがその時はこれがそれほど古いものだとは思はなかつた。

それから博物館の人にも見せるとこれは珍らしいものだ、一寸貸して貰ひたいといつて持つて行つた。博物館の人達が研究して見ると、これは年號の未だなかつた時分、天平を遡ること六十年も前の、白鳳朱鳥の頃のものだらうといふ、その證據にはその頃造られた鐘の銘や何かに郡を評と書いてある、天平の御經でも千年以上も前のもので珍らしいのにそれより前のものだから日本中にあるかないかわからぬ位貴重なものだといふことになつた。

それでその方のことに明るい京都の故內藤湖南博士にも見て貰ふと、氏も確かにその通り、これは珍らしいものだといふ、白鳳の頃出來た大和の長谷寺の法華說相圖の臺坐に刻つてある字の書體とこの御經の書體が全く同じだ、恐らく同一人の書いたものだらうといはれた。

それで偶然に見付けたこの御經が極めて貴重たものだといふことがわかつた譯である。支那から渡來したものではその頃のものも二三あるが日本の寫經としてはこれが最古のものであるといふので、後年この御經が國寶に指定された。

そこで例の奧書のことだが、歲次丙戌年五月は天武天皇の御字十五年五月のことである。又、川內國志貴評は前にも述べたやうにその頃は郡に當るところを評としてある。その

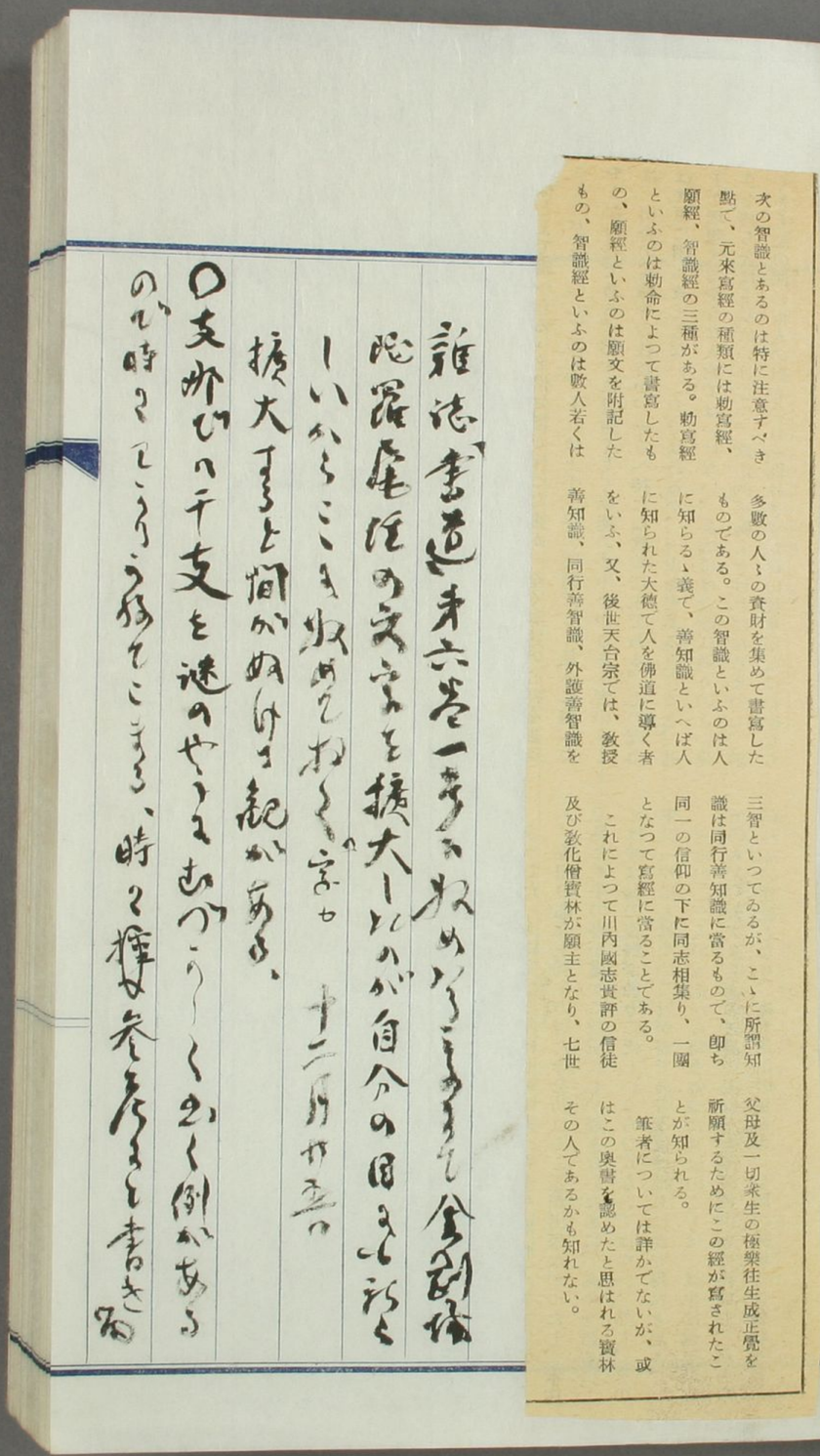
樣原製

言世尊如来經
中為諸衆生說
遠離生法云何

次の智識とあるのは特に注意すべき點で、元來寫經の種類には勅寫經、願經、智識經の三種がある。勅寫經といふのは勅命によつて書寫したもの、願經といふのは願文を附記したもの、智識經といふのは數人若くは多數の人々の資財を集めて書寫したものである。この智識といふのは人に知らるゝ義で、善知識といへば人に知られた大德で人を佛道に導く者をいふ、又、後世天台宗では、教授善知識、同行善智識、外護善智識を三智といつてゐるが、こゝに所謂知識は同行善知識に當るもので、卽ち同一の信仰の下に同志相集り、一團となつて寫經に當ることである。

これによつて川內國志貴評の信徒及び敎化僧寶林が願主となり、七世父母及一切衆生の極樂往生成正覺を祈願するためにこの經が寫されたことが知られる。

筆者については詳かでないが、或はこの奥書を認めたと思はれる寶林その人であるかも知れない。

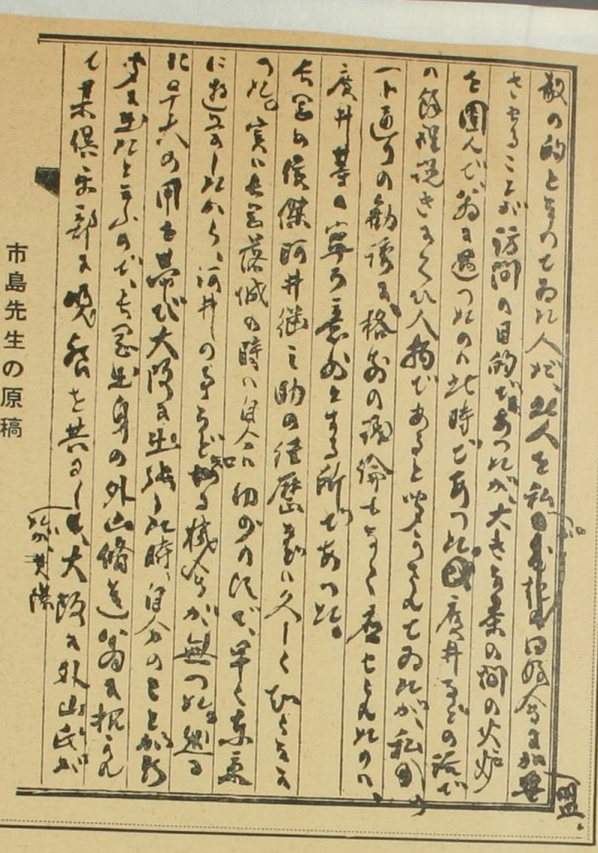


又書家や文人等は爾雅や史記等に據つて十干十二支の別名を用ゐることがある。卽ち

甲　閼逢、焉逢　　乙　旃蒙、端蒙　　丙　柔兆、游兆
丁　彊圉　　戊　著雍、徒離　　巳　屠維、祝犂
庚　上章、商横　　辛　重光　　壬、玄黓、横艾
癸　昭陽、尙章

子　困敦　　丑　赤奮若　　寅　攝提格
卯　單閼　　辰　執徐　　巳　大荒落
午　敦牂　　未　協洽　　申　涒灘
酉　作噩　　戌　閹茂、淹茂　　亥　大淵獻

といひ、日常に使はぬ文字があつて、甲子の年は歲次閼逢困敦と書きゝ昭和十二年の丁丑は彊圉赤奮若と書くのである。支那人の落款に此紀年法があるから知つて置く必要がある。尙ほ干支の字義に就て研究したものがあつて、一部は判明して居るが全部は判らぬ。此事は長文となるに付き省略する。



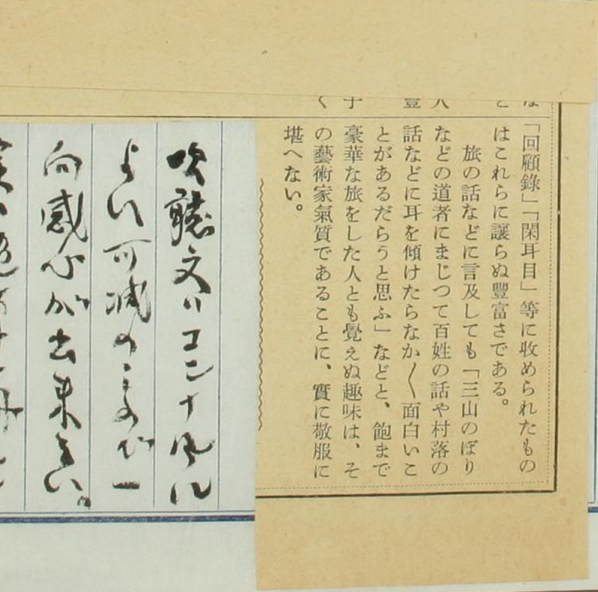
市島先生の原稿

市島先生が老齡に係はらず壯者を凌ぐ元氣で居られ、筆硯に親まれてゐることは前號にも說いた。しかも、その原稿を拜見すると、日本紙に墨痕鮮やかに克明に書かれてゐるのは驚嘆に値する。（右の凸版は先生の原稿）

森閑

「回顧錄」「閑耳目」等に收められたものはこれらに讓らぬ豐富さである。

旅の話などに言及しても「三山のぼりなどの道者にまじつて百姓の話や村落の話などに耳を傾けたらなか〳〵面白いことがあるだらうと思ふ」などと、飽まで豪華な旅をした人とも覺えぬ趣味は、その藝術家氣質であることに、實に敬服に堪へない。

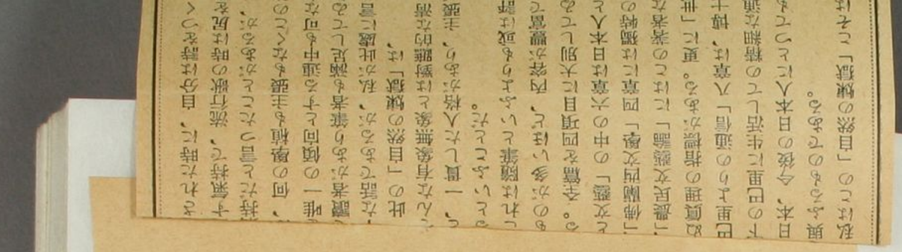


又書家や文人等は爾雅や史記等に據つて十干十二支の別名を用ゐることがある。卽ち

甲 閼逢、焉逢　乙 旃蒙、端蒙　丙 柔兆、游兆
丁 彊圉　戊 著雍、徒離　巳 屠維、祝犂
庚 上章、商横　辛 重光　壬、玄黓、横艾
癸 昭陽、尙章

子 困敦　丑 赤奮若　寅 攝提格
卯 單閼　辰 執徐　巳 大荒落
午 敦牂　未 協洽　申 涒灘
酉 作噩　戌 閹茂、淹茂　亥 大淵獻

といひ、日常に使はぬ文字があつて、甲子の年は歲次閼逢困敦と書き昭和十二年の丁丑は彊圉赤奮若と書くのである。支那人の落款に此紀年法があるから知つて置く必要がある。尙ほ干支の字義に就て研究したものがあつて、一部は判明して居るが全部は判らぬ。此事は長文となるに付き省略する。



學藝隨筆「我執轉々記」閑錄

市嶋春城先生の隨筆

白鳥省吾

市嶋春城先生と坪内逍遙博士とは兄弟もたゞならぬ仲であつて、熱海に於ける坪内博士の寓居にての交歡が今度の隨筆集「鯨肝錄」（十二月末第三回配本）のなかに實に美しく豐かに描かれてある。

また政治家で趣味家である半峰高田早苗博士とも親しく、且つ大隈侯とはいつもその旅行の同行者であつた。この「鯨肝錄」のなかにもその豪奢な旅行振りが書かれてある。

何しろ、越後の市嶋家と言へば縣外にまで響いた名家で、この隨筆のなかにも四隻の廻送船を持つて居て、その積荷のかへりには各々、千兩箱を積んでかへつたらしく、新發田の藩主溝口家の御用達でもあつたらしい。

萬延元年生れといふと、もう七十を越して居られる筈だが、瞿鑠として壯者を凌ぐ元氣で、毎日、時間をきめて端然と机の前で筆を運んでゐられる。

今度の隨筆集の編輯にも、實に細心な注意を持つて、會心の著を出されることを心がけられてゐる。

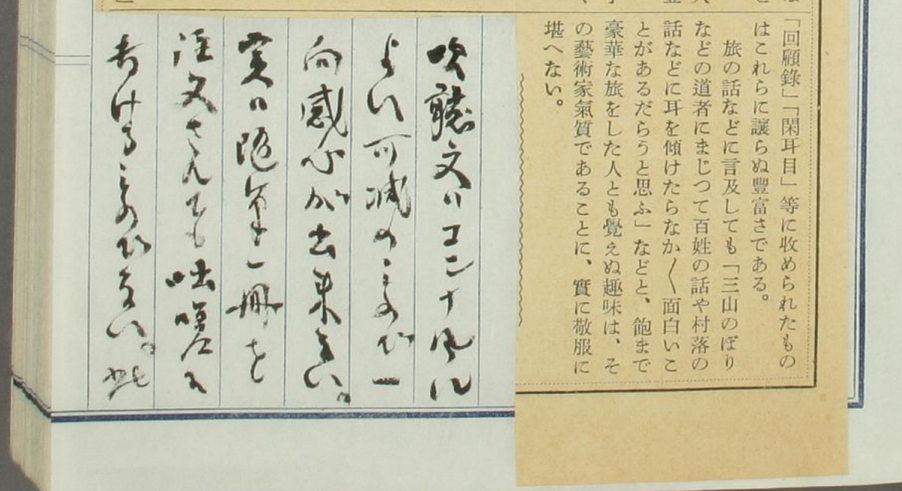
何しろ深さと大きさとを感じさせる人格を持つてゐるし、見聞と讀書の廣さ豐富さは驚嘆すべきものがある。

試みにその內容の四分の一たる「丙子雜俎」の中の要目を擧げても次のごとく多い。

富嶽禮讚
可否茶館
雅邦の逸事
ダッチワイフ
行誡上人
藝術家の放屁
江戸兒の任俠
石川博士と猿
鄙俗の藝術
俳人の洋行
喜怒を鐘に托す
川柳の碑
葉がくれ
馬琴の秘話

等々五十六項あり、その他の「讀書雜抄」「回顧錄」「閑耳目」等に收められたものはこれらに讓らぬ豐富さである。

旅の話などに言及しても「三山のぼりなどの道者にまじつて百姓の話や村落の話などに耳を傾けたらなか〳〵面白いことがあるだらうと思ふ」などと、飽まで豪華な旅をした人とも覺えぬ趣味は、その藝術家氣質であることに、實に敬服に堪へない。



過年東方に二冊既刊の支江五十家のものを見て時務報の
客の七集めて（きたいの定に前自分の二三（本既刊過
半から掲つたあしもあるが、七分通りの新稿である。
特色が多く、材料の豊富なる點は決して他に優
ないことを自負する。自分のうんと（十数冊の過策を出した
あるが、皆つた既出のうちを再出したことはいうまでもの類
所紙の四版紙を（過去）と大漠長の新しいものを過策
平福田から取り入れた譯で、過策の平福田が後も出来る
例年さんに載が多く、場合の活から二冊の勧めをとて
ルのがある。自分の過策の長所は、過策家も
上冊位出すと、過去を徐が去きうするが、春城は毎年新刊と
言ふのは、こんな（過）樣にしてもらうが、材料の豊富なる

複原製

色、殆んど趣味が違ふいかなるものとなるべき。
○分相の沿革既は盛禁中の蔣氏の夫人となれと浴場を選つ
ルと報じてあるが、これは誤報である。宋子文と結婚云云の噂
る安徽が成つたとて、大体活のりのデダーは失敗に終
つた。張が新角出現を期つたが、躍つまがうく、四国の形
勢が不利になる時、張も安徽することが出来ず、終に
下野洋行と決したと伝へられる。安徽の結果として蔣
ルは不四を過ぎしたらしい。今後の支那の政局いかに動くか、注
目に値する。幸に支那の擾乱を免れた。支那いはゆる安徽四省は
の成り立つ国で、日本郵人の感想のある。安徽四省は、
人質が常に行はれる。蔣は蔣の生業と得ルる此故である。
蔣が死活の問題に立つて張の強制的條件を拒絶したのも

流石に武将の面ほかなる。夫人が豊臣家に良人の難に
逃いたの心古女の趣がある。支那歴史に珍らしからぬ
芝居化が、本書に之れを現実に見る事の興味を覚へる

十二月廿二日

○村山龍斎より亡妻の追懐帖を示されたるに、左の一句を書す

御供信おるこころの業研鑽を通りて通る

涙容故遺現実情大峡の御作品の作風

と題する冊子宛を受取る。美吹氏の作品

紹介奉謝を忘れ難し。御とも御お後

信を御奉祝の日御信仰さん後述

せん、御影脳の御作の隠者と閑き毎々

う秀淵の御文藻と高段作の論説真の作

の裏面なる生らも武信人を動かすものあるに

ものとなるべき為方信の秀作のみを

常套と義す八生涯幻を捉えるある主人の文

藻と称する似る浮羅の文章を感服

仕、色紙揮毫を紙碑とする時代の御筆を

愛し大師の書現と新し墨痕を新り中

候部

十二月廿二日

○去廿五の大正天皇陵祭の夜、切迫四五の内閣

をうじて倒れた、此内閣は移動市民劇の吟待や演口や

後藤新平氏もあつたが、自分の所へ呼び出した大隈
侯の内閣が出来た。侯が伯爵になられた祝賀
の宴席に、さすがに演説は特に蓄音機を吹き込ま
せんが全国へ振かつれるである。政治家が蓄音機を政治
演説を吹込みさせんを実用に供したのは確かに元祖
であつた。私は此の演説者を大隈侯後援会長として其の
つれから、此の蓄音機の吹込みを関かつた。さんは侯の自説を
で吹込まれたもので、第二番目と第三番目とある大蓄音機から流れ出
りは親しく後援会員の面前で吹込まれたレコードを全国へ出されたが
から侯が全国へ行脚されて、やはり効力があるので、却て侯と
吹込を行つたが、侯の不出演を元から憂世がハニカムやうな
初めの内は躊躇されて、私は夫人にまで勧説を頼んでやつと

承諾を得た。普通さんが吹込の器械の後面の蓋を開き
出張を要するのが、今社は出張を要する器械を始め
こ早稲田まで運搬して侯の書斎と客室と二座敷宛
の果てまでの長い長い器械を据付けたから、侯の足元を
焼いたことはなかつた。侯は私を長いと言はれ聽衆のきいれん
しやべれのは不自然だと言はれて居踏躇の気味がある
の、侯の吹込まれて居る時の前に鏡を置き、室内の人数
の早稲田の顔を鏡に映し出すとして
見れば鏡さんの前に鏡を映し出すとして
ると侯は私に居先づ国民ひりをやれとあるから、自分は
左の演説を試みた

只今ご大隈侯の演説がありました、演説は興論

勢力」でありました。

えが私の内部で侯の内部と共に大く溜め得る点に来た時代の実に記念の仕合であつた。侯は漸やく立ち上つてラッパに顔を近つけ、例の朗々たる声力のある調子で演説が初まる。まず聴衆にルまるに侯は初度の吹込みを演説の要領を熟し、ひまあり暗と感ずる入つた。稍ゝ五分毎にレコードを取換へるのみ、三四分休憩することが三度あつたが、侯の此の僅かの休憩の間に人と話を交へながらも、のみ私は侯の妨げをしてはならぬと富を集まつて無言を指図し侯の満足と吹込を終りました。侯は二三回を使も吹込演説の要領を換へると云はれたが、ふ宴のもも美味しかつた。二家語るが為に大に楽しまれた。

立派な文を草したのレコードが有つたが、此の一此庵のうち大が侯の内部を伝ふ得たるだけ、ラジオだけ余の伝かも聞く侯の演説も首都の伝三分の一位を放送した。是も興味の勢力とアナウンサーが言つたのも誤りであつた。

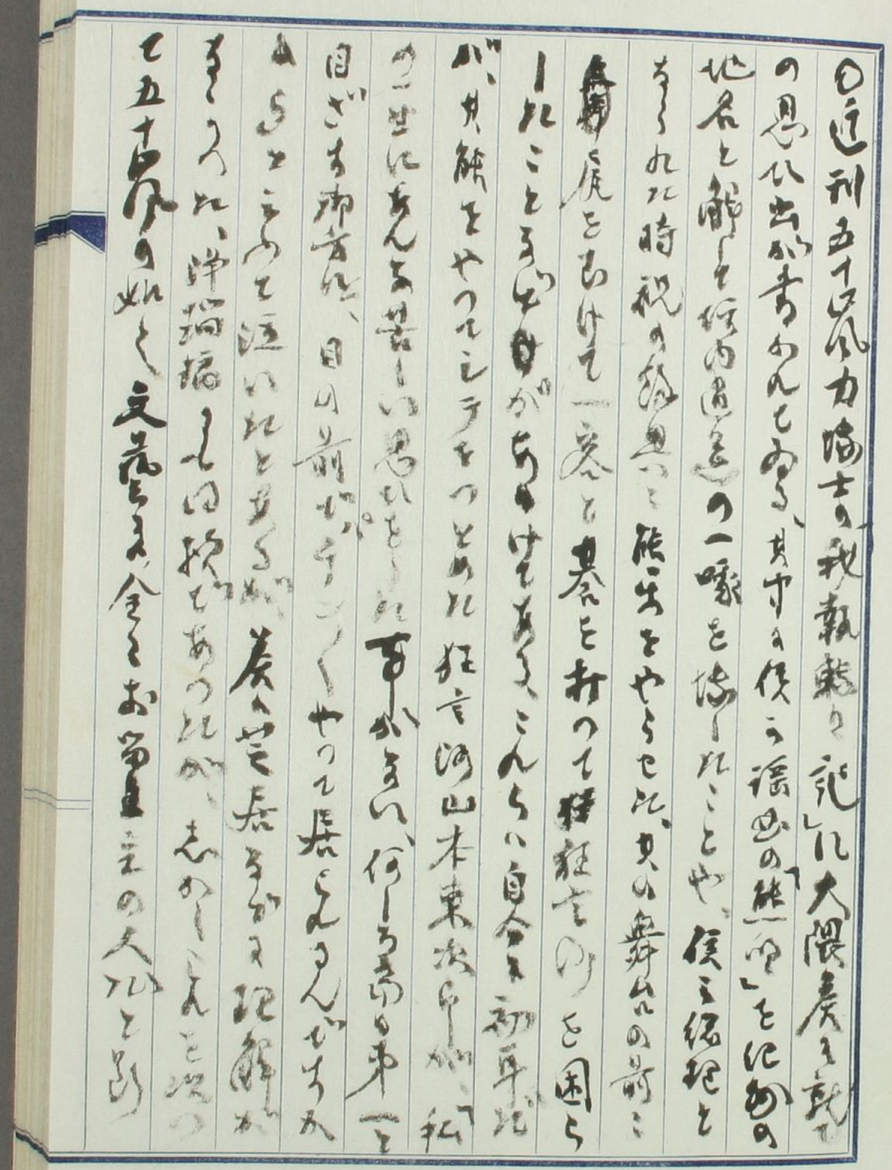
○東洋趣味雑誌の左の一文を載せ、桑田氏と春風と弾し早稲田大学に学位雑誌を見りしれ候。余も助力した趣味の日記を出版したのは其時であつたと思ふが、まんま自分が序を書いたことをば改を考へて見ると此の記憶が蘇かへつた。

趣味の日記

養拙窩主人

明治四十四年、京橋の良明堂書店から、桑田正と云人が編者で趣味の日記が發兌された横綴の小型洋本不折氏の口繪が二葉表紙、體裁共に頗る洒落た袖珍本で、その中には種々の日記が蒐められてゐる。八百年前の久我通親の日記より編輯者當時の文士の日記迄。前中後の三篇にあるもの盡く面白い。序編に市島春城翁は、日記の趣味とその價値と題して縷々例を擧げて詳述した後

要するに日記はその眞なるが故に、趣味深く、眞なる故に價値があるのであるから吾れ人共に極めて眞率なる態度を以て、成るべく精しく、日常見聞の事を記ける習慣を養成すべきである況んや今日顯要の地位に立ち國家の樞機に參する人々に於てをや云々と云はれ



て居るが、筆者亦同感である。
淡文日記が載せてない。簡單に
却て必要ではあるまいが、鵜
湖に公示する所以は、此簡單
な様に感ぜられるからである。
猶名元邦、字秀之、松塘と
國分村谷向に生る。道順の長
保十年梁星巖の門に入る。七山
治元年居を京に移し、七山
時に或は講國に遊ぶ。後藤鄭
那古町川崎に歿す。年七十二
十餘。頃年安房勝浦會にて、
明治十七年申日
東京一月一日晴
渋谷田園圃

辛巳　一日晴
壬子　三日晴
癸丑　四日晴
甲寅　五日晴
乙卯　六日晴

鷄鳴四聲　鷄鳴也聞梅
柳也聞梅　柳也聞梅
鶯來枕上聲　鶯來枕上聲
無夢便一覺　無夢便一覺

榛原製

日記刊行の秋熟す。況し大隈侯を既
の思ひ出かきあんとする、其中の俳句の「紙一帖」とにあの
地名と解せられる。
この一喝を浴びせられることや、俳句を作
れた時代の秋熟す。
春と新つて狂狂たるのを困ら
せることなかれ。こんらい自分も初年に
狂言師山本東次郎が「私
が紙をやつてシテをつとめ
つ一生に忘れられぬ思ひ出
日ざす所者、日の前がぱつと
ちらつくやつて長くなんかすん
春の空長くかゝる記憶が
ぱつと消えたが、忘れられぬ
ちらつくやつて長くなんかすん
春の空長くかゝる記憶が
ぱつと消えたが、忘れられぬ
ちらつくやつて長くなんかすん
春の空長くかゝる記憶が
ぱつと消えたが、忘れられぬ
五十年の如く文芸を通じて

て居るが、筆者亦同感である。乍去此の本の中には詩人の漢文日記が載せてない。簡單な日曆は多忙な人には、現今却て必要ではなからうか、鱸松塘翁の日曆を敞簾中より江湖に公示する所以は、此簡單なる記事が、筆者には趣味ある樣に感ぜられるからである。

翁名元邦、字彥之、松塘と號す。文政六年十二月、房州國分村谷向に生る。道順の長子なり、天性詩才に富み、天保十年梁星巖の門に入る。時年十七、詩名天下に高し。明治元年居を東京に移し、七曲艸堂と云。帷を下して教授し時に或は諸國に遊ぶ。後歸鄉、明治卅一年十二月廿四日、那古町川崎に歿す。年七十六。所著房山樓集其他詩文集若干卷。頃年安房顯彰會にて、其事蹟を表すと云。

明治十七年甲申日記　　舊曆十二月四日

庚戌一月一日晴　訪淺田栗園

辛亥　二日晴　陽三一來○午後地震

壬子　三日晴　訪大沼○小野○加藤九郎○田中生來

癸丑　四日晴　蒲生吉岡二生來○夜好雨作

點滴四擅琴筑鳴也催梅柳也催營聽來枕上清

甲寅　五日晴暖　福島老來○矢吹兼山書來

無夢便是新年第一聲

乙卯　六日晴暖　訪柴原和氏岡本黃石蒲生氏○藏野生來

丙辰　七日晴暖　稽古始

丁巳　八日陰　小野湖山、日下東作來

戊午　九日晴

己未　十日晴　訪柳圃不在過櫻蔚小飲○寒甚

庚申　十一日晴　陽其壽郎安井泉來上州利根郡下津村內海光太郎寄詩乞正

辛酉　十二日晴　熊谷三村來○夜雨

壬戌　十三日晴　赴加藤秋爽招飲田部氏去年十二月十七日書未

癸亥　十四日晴　吉岡弘來○作各處答書

甲子　十五日晴　將游熊谷午後駕氣車晚投浦和驛

乙丑　十六日晴　早發浦和午前投熊谷三田氏

丙寅　十七日晴　留宿彼美氏○晚小雪

丁卯　十八日晴　辭三田氏姊妹送至停車入夜歸家

戊辰　十九日晴　夜地震

己巳　二十日晴　小貫復浦　有馬龍齋來

庚午　廿一日晴　小貫庸德來傳卯兒任廻館學校員之命

辛未　廿二日晴　村尾元長松田敏吉岡弘×來三木敬十村上壽森繁之助書×來卯兒拜北海道命

壬申　廿三日陰　昨夜鈴木長右來宿○清水義方自上田裁判所致書

京城昨日話離情相遇無端悲喜併不忍手明朝作越中獨行匆匆又分場邂逅停木車內江山翁遂同宿輕井澤驛賦贈

まることいふまでもなき事。侯の江戸を発途し此伽藍味や能や流
曲等の新しみを加へ伽藍の無のけけんを、決して文義を仮
味を尺いて若干の伽藍を材料として頼る事を得ざるべし、必ず教育後本
を第一とし、天皇の聖旨を奉ずるの教を知り、仏教
を以て本邦の国体の基礎の者と仏説を信ずる能はざるべし、
先伊勢神宮を拝んの例の金剛力を聴き古今記を引
用し此割切の講話を出発し能はざるべし、大宰府
の四寶仏像が元禄の新盛物を修復されし跡の不完全
を嘆ずるの声、京都の美人の政権への
体を移動するまでと説いて来る。江戸趣味の由つて来る
淵源を説いて、外面は本綱を着て俗細の繁体を示す

標原製

潜めて陸奥の家康を倒すべしと、侯が各所の
味を直つて、そんな立派な遠藤が来ることを張ることあり
来るまでの侯が国義を紅味のあることも亦ここの附け
加へておう様にいろいろまで。美が四庭園に徒者の四倍家の
作庭を破つも、文人作を仏さんにもも侯の十長眼
[illegible] 新たに新和の人ひあることも美の言い伝
味と法ことのとも有りまして
○貴公は毎日の立時は兎角とやつて碎後直ち寝る就
くのが例でもあるが、うじうじ眼を醒まさんと寝ない
睡眠を得ずして寝ることも嫌も好いさそう、ひとり
酒を温めて飲むことが毎日あつて其の祖宿の酒が実
にうまい。恐らく北時の酒が最も徹底した酒が多

らうと思ふが、誰れか来て呉れる事もあるし、お世話をする人もあるし、つまり此の世を送る為めもあるし、黙して居る間に天真の味がある。孤蓬蕭然と云へば哀れげでもあるが、保養時代のカワリと云ふ事を考へる。お高祖閑居の境遇と酒を浄化する相手を待つ欲の徒に酒を二の次に置くことである。徹底の酒きは妻、妾と云ふ相手をもたぬ人、多妻い唯々流々する人、もたぬ人は解脱せる人きれかるものもあつて、唐の波閑公が起きることもある。

○年暮さん春ん人とも、余い来年何を為すべきか、唯だ閑を乗じて注方の新法なる閑筆を著し、以て無用の業をなすべしと思ふ。左の如き日々

東京製

一 今日市内の個人新法に「改さだ」の名を命じ其の由来を著して序とする

一 相馬藩の紀念出版を推奨文を寄す

一 政界往来に抱業一冊を寄す

一 新法方志略に余の投稿郷土自慢を載せ

一 二月の頃今に先立つ二日故に高の病に臥し福内鬼外の歌笑を寄す

一 郷土の出版城後郷志の序を作る

一 二月七日徒文社より余の抱業春風閑話を発行す

一 政治往来に抱業「ナポレオン」を投稿

一 富山房より『中庭樟』全集まつき共序文を寄す。

一 書物展望社より『余の随筆』『紫煙漫筆』を出版す。

一 富山房出版百科辞典に『印刻』の一篇并に印影標本を寄す。

一 丸善の『蛙』開刊四十年に際し『追懐文』を寄す。

一 本年一月より四方新聞『雑話』無節を兩子『雑録』の一欄を設け予の随筆を連載す。

一 東京日々新聞の『新』の『回顧』一篇を寄す。

榛原製

一 余の既刊随筆中左義長の一篇丸山林平の『焼』と『文』の後半を転載す。

一 文藝春秋社の『屠』と『文藝春秋』の『蟹と泡』中より『情』を抜す。

一 六月初旬房州中『新』を拾ひ『記者時代』の長篇を録す。

一 随筆『鞍山』『鈴』『里』日本会より改版発行。

一 文藝春秋に随筆一篇を寄す。

一 放送局の『焼』と『七月三日』『三月』を放送す。

一 富山房の『焼』と『出版』の『今昔』とを記す。

長篇を筆し作

一 余の随筆中今の一篇大日本脳合ち年間の
ち年間の校教本に収めらる
一 余の随筆中林子平の一篇金子元臣編国学
の中等国語読本に採り入れらる
一 随筆三則雑誌報知に投稿
一 以前多随筆行の女子用教科書女子国文選
に余の随筆「文(墨客を懲る)」内馬琴の
記室の路の一篇を採録
一 重訂「日誌の要訣」一篇を採録
一 余の随筆蕉堂一夕話二冊を改訂一冊と
なし文人墨客を懲らしと題し出版する
墨田の名勝を行

一 雑誌懸影の寄稿を求め墨田の深夜
図を飾りもやる
一 雑誌報知に「梅干と鰹節」の一篇を投
す
一 東京堂白鳥君の需に応じ年末余
の随筆を刊行せんとす九月末より毎
日日課として筆作を出だし即稿所収也
一 東京日日新聞の雑誌ホーム、ライフ
に「漫画と爽体書」の一篇を寄す
一 新潮の新年号の焼き直し松波博士の随筆
日記きの短歌きを批評す
十月廿一日晴放送局の需めらるる講演

創設時の基礎の思ひ出を談ず

一 澤本興一の思ひ出を養ふ日人倶楽部

者の集合

一 基礎確立の後援者の移を補修して政界往

来を投ず

一 安田善次郎死去せらるる追悼の文を都新聞

書記の名を雑誌芸林に投稿

一 日本那合古年国の雑誌「古年

の自覚と自批」の一篇を寄せ

一 大阪朝日の嘱を受け「雲の朝」と題する随筆

一篇を寄せ

一 四月号行三者生の雑誌「書鑑」に原稿を

横原製

のかけ一篇を寄せ

一 「江戸と東京」と題する雑誌に連載の随筆

四一篇を寄せ

一 日本国文学協会雑誌に連載の随筆

十一篇を終る

一 鶴肝録四百頁校了 十二月廿日上梓

一 雨の雑組と題し今北雑誌に毎月連

載の十冊に及ぶ

一 文部協会の改文「大日本」雑誌に外国人と北海

以上 道行をまむ」の一篇を寄せ

○続いて本年の家計を一覧すると、本年は多費を要し

北蔵の人。毎年借貸が出来て、一万円位は出来るが、常
収入の無いこと、借金は出来る丈け少くしようと云う預金を始める
ものの本年の多額の寄付金の臨時支出があり
ましたが、臨時の収入として六万二千円の多きを及んでどうして
か婚礼費の新設を生じた。斯く臨時の収入のあるものを
早大出張所の預け金の歴年金が不況の為不況きな
つたのと、三千円、千五百円、土千円と九千五百円を三回の
銀行しなのが幸いしたのと他に五百円三口の臨時所得
があつたこと市内の人が出来て年後に五百円宛の寄付金の
大出張所も出来ると共に一かく久しく到達
を得りに成ることを出来ること次上で一
番に千円に上るが、他に後援者の久富氏から

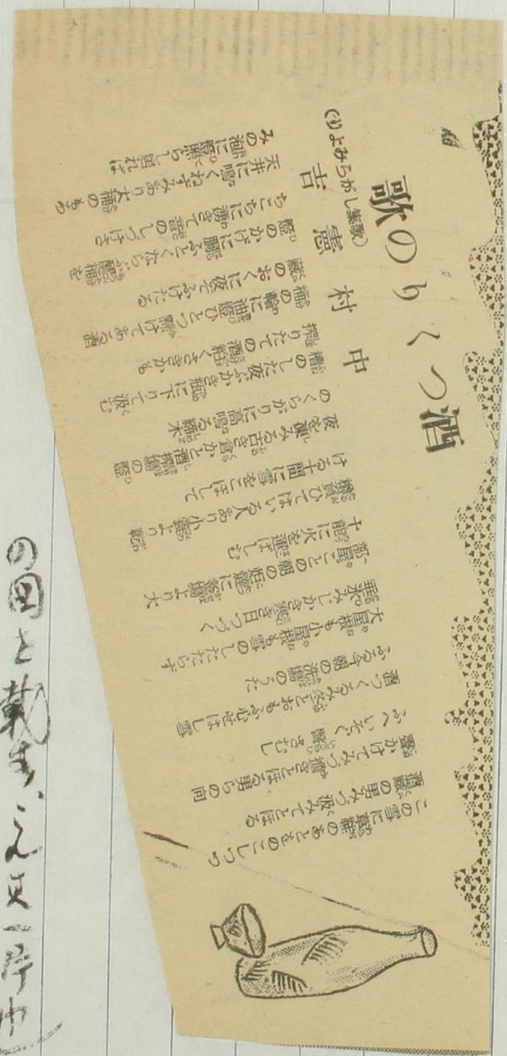
榛原製

婦人に三百円教育資料、原稿料、著作会員が約八百円
位となるべく、斯る臨時の収入を臨時の支出を振分けの
ようにすべく、而市の家計に
の預金をして二万円の預金に三千円を預金する
ものとして、こんが本年金庫の概況である。別途も寄
の収入株券利子■其他八千円
のあるのは臨時収入の内の支出の使途に属し新設
○年込の各町会聯合会
東五軒町町会相浜後援
北印旛を作りて志賀狀と感謝狀を寄せもきめの
自分は美ちゃん貢献一に自覚するべく、年過ぎこと
七ちいことが長く、志賀狀附属の名簿に載せること十三

年とまるのに東西所々所今が設けられし比年かも遠年し
比のびちゝが、実に三十年ばかり牛込に住し、毒蛾に多
あまたの住んれのもおいことなる。今の住所に移りから
移つれども、早大の騒動のあり比時ぞ、大震災も
此の住居ぞ忘れ難し。前の此家に入ることが危険ぞ
玄関前と物置小屋のみ、ここに附り四の土三家族を
収容せしめ食人分に二三枚の畳を敷へて二三日を
こし比ことをもぞ思ひ出す。夏の満家に神宮外苑
るのぞ所今の場合いつあそこに別かん、夏浦諸人の春冬
中い合ち所いれことがあつた。満家が集合所ぞ
りをつゝ実に一回も協議会を持ったことがなく、年
一回の総会だけなれば出席しもなく、所今がよ

複原製

くに任せさんとあるのに二三枚ばかりの世話人があるからぞ自分
などの方面ぞ、　　十六月廿八日記
の酒を礼賛する杜氏醸酒の著聞を思ひさるこのこと
酒の左の酒の歌を後の、　　都城ノ伝後小千谷縮日酒



歌のりくつ酒

（ひとやらかし歌）

吉　　酒　　村　　中

の酒を載せ、こん夏一序也

○印人高田正之が義士の名の品を所望もとめることい無し

（高田先生遺墨）

日新次郎時代の文章、師範時代の文章、教員時代の文章、其他に於て先生の手に成りたる書類、殆んど一枚の反故だにもなく、一切焼失したるは、実に惜しむべきの事なり。

師範は、元来、明治十年、東京に於て、初めて、師範学校と、称せられたるものにして、爾来、師範は、其の主業たる、教員養成の、唯一の、学校として、其の、教育の、実績を、挙げたるは、実に、九十九年の、長日月を、経て、今日に、至りたるものなり、師範は、其の、創設の、当時

大和良相時代の写し金銀貨の行はれしことを考証するに足る。明治九年三月大和国添上郡法華村寺院址、其地開墾の際金堂跡を穿ち銭金二枚（内一枚は偽物）納む一枚は余が私有とする）銭銀二枚（内上）外紙貨二品金珠を振出したり只原物なき天平時代早く金銀貨あることを考証するに足る原物を除き他の考証のみに拘はる原本を珍蔵することとす

一　絵手紙

川端玉章一面
堀川文鶴一巻
共に此枝おもしろきところあるを以て挿画の故を以て掲ぐ

一　輿地書画帳
こんい奉書の縦本を短冊色紙罫箋等を仕掛るものにて雁金屋平七山人が人の押意を請いんとて特に作りたるものなり二冊共輿地版

一　京府泥仏遺墨一冊
京吉郎の詩を例の黄色ひ紙

一 いるかの九枚白楽天の詩を四幅に染めし
なるもの三枚せと流水の山印を捺す

一 三河古瓦塔 一冊

以上

○近代編纂の前島男爵の伝集郵便創業後
刊行一冊を贈り来る、もと山の著作なれば余も嘗
つて海外諸国を歩し関係から男爵の伝
を書郵便創業時代を記し、又時の材料を提
供し居る。○創業後、海外諸国を採入し、郵便関係の
もの多くの参考を収めらるるとの由
男爵の遺志を採録し、海外諸国と併せて保存す

標原製

べきこの也

十二月廿九日記

○余の仙を始め毎年床の置く、支那の仙の蟹殻を
なるもの有り、既に、仙を始め、絶つて仙の無きを
恨とせず、先年始めて白蟹の長式楕円の一箱を得、四五の仙
仙を並べて愛玩すべし、有る者集めべートとて、赤一箱を
得たり、ナマコ干しにて長方角、長さ二尺二三寸、白
磁に似たれば、一等優る、仙六個を並べ得るのみなら
ず、其の色も仙の白を兼ねて、仙の置くに如き無也

○鶏肝炉が年の正午と年の瀬と毎日毎朝
てきた。ころ天保小判自分の掘出を紙きいるも

あるべき筈なれども、撰任者が頁数を多くせんとの目的にて、脱漏を多くせしなり。一つの誤りを訂すれば、前後の関係上、百頁程の改訂を要するなり。今百頁程の改訂を為すとせば、新たに印刷するよりも、寧ろ初めから印刷せんにしかず。無益頁数のものと再検特選し、利益を誤り無駄の時を折ることの愚を省まん。

十二月三十日記

○高野の数軍荒廃の有り様、堂塔こそ少けれ、小の仏像三基を時の人、一いに九谷焼と称し、殿堂の上に安置し、高さ一寸八分許りの特色あり、他の二基は古物にて例の六朝式四角の基なるも、六朝と雖も、他の一の時代較々新しく不動明王の坐像にして、金の数年前なりと

八角仏像なれども、仏像なるを発見したる五十年以前、懐中あるいは袋物の如き物にて納めたるもの、鍍金の物なり、鍍の初めなる厨子に入れる体仏あり、方形の木地の厨子にて蝶番ある木地仏なり、外に厨子と仏像を共に具するものあり、古物の厨子に納めたる小仏像二体あり、焚種の厨子に納めたる一体あり、金属製の厨子に納めたる二体あり、三四寸位の仏像なり、其内一の厨子に八体あり、三体あり、三体は鍍金の仏像なり、其内一の厨子に八体あり、三体は鍍金の仏像なり、其内一の厨子に八体あり、三体は鍍金の仏像なり、其内一の厨子に八

義尊、[illegible]時代と認めべき木彫、銀を被せる六角仏、
[illegible]物製造箱を模し作る[illegible]龍宮城の模型、[illegible]品才一々列記
に炎いし、要は各種のものを以[illegible]貨幣を陳列し[illegible]
[illegible]

[illegible]と[illegible]木彫侍者四基[illegible]
形や大きさ[illegible]
[illegible]土塔七個[illegible]、任意に塗金のもの
[illegible]大星天大形[illegible]
[illegible]金属製[illegible]仏像[illegible]
面の根付[illegible]釋迦[illegible]木彫の羅
漢立像[illegible]、又土製[illegible]像の複製[illegible]
洋[illegible]の刻[illegible]多解の幼[illegible]べき仏像[illegible]

複原製

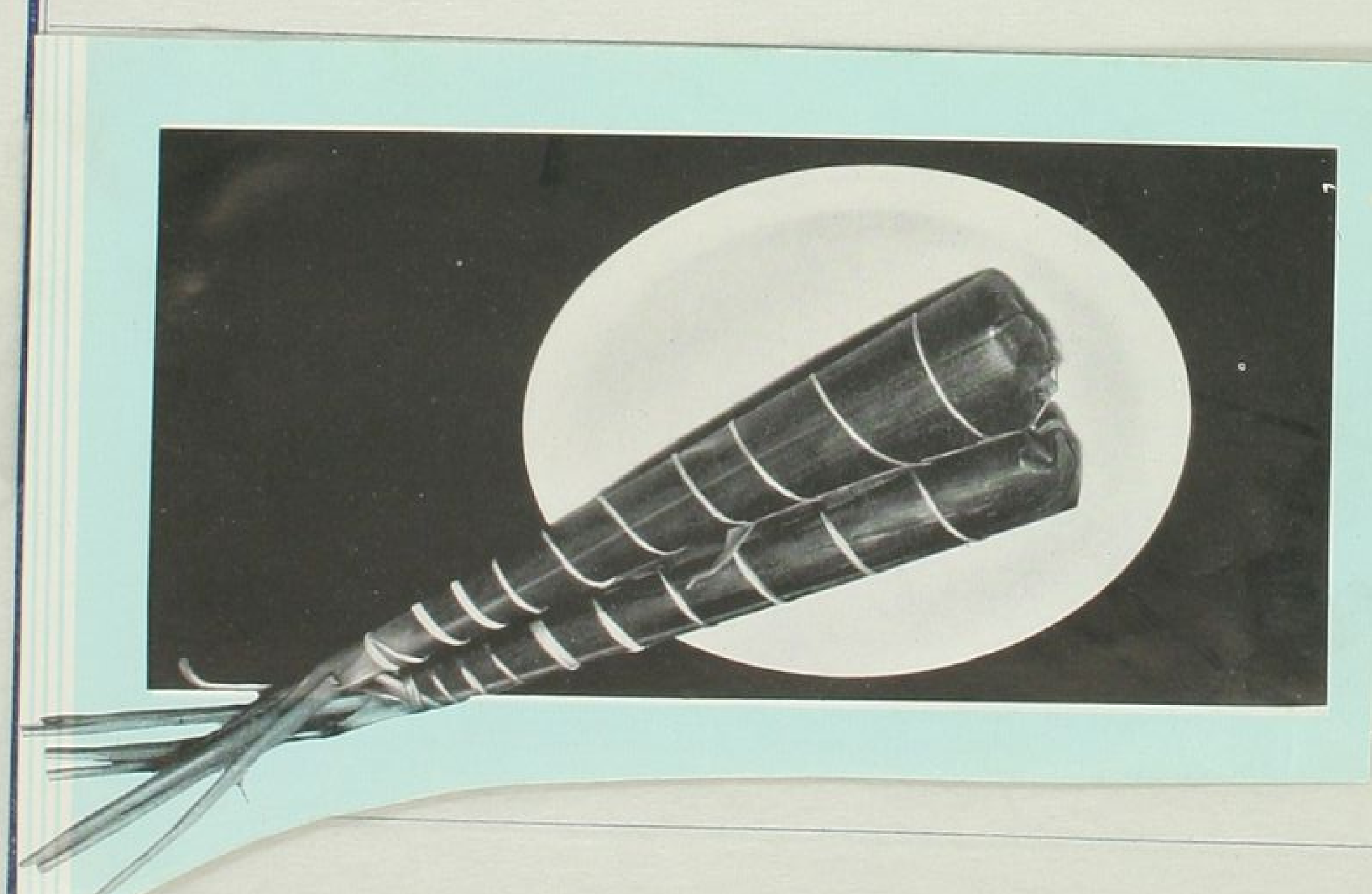
[illegible]中の立像[illegible]、金属製[illegible]第五の[illegible]木彫
十世紀の[illegible]立像、獅子[illegible]
木彫大星天[illegible]、

佐渡に紅葉句碑

小糸も思出の醵金

月涼し橋かけたやと唄ひつゝ

これは、明治文壇を風靡した文豪尾崎紅葉が「續金色夜叉」の文想を得るため明治卅二年即ち卅二歳の夏、佐渡ケ島小木町滞在中に小木の夜景を吟じた遺句で、佐渡でも夏の代表句として後世に殘さうと云ふので、小木敬吉會長塚原徹氏（當時町長）が、句碑を町内城山公園に建立計畫を樹てたことは既報したが、以来同會が主體となり、現在まで佐渡を訪れた名士三百餘名から自筆の色紙、書讃、寄附金などを蒐集中、この程書讃五百餘點にのぼつたので、近く新潟市で建立資金獲得に即賣會を開催することになつた、わけて在りし日の紅葉が舞妓お絲と艶名を馳せたことは紀行文「煙霞療養」で有名だが、今は老た思ひ出のお絲が過ぎし日の情人の句碑建立に匿名で醵金するなど、いろ〳〵な意味で人氣を集めて居る、句碑は、土地の名勝天然記念物である枕石浦の玄武岩、枕狀熔岩に刻むものでこの計畫に贊同したものは廣田首相、永田拓相、津田青楓、白鳥省吾、中山晋平の諸氏など各方面にわたつてゐる



標京製

以下
44丁
白紙

横原製

書道博物館竣成祝賀會

各派代表一堂に集り

書道界未曾有の大偉觀

中村不折翁の書道博物館竣成祝賀會は十一日午前八時半盛會裡に閉會したが書道界各派の有力者がかくて主賓の健康を祝して午後一堂に會したことは近來稀なることで非常な偉觀であつた、尚地方からは園田湖城、中村眉山、安西米城、淺野松軒、恒川樵谷、沖六鵬の諸氏が參會した

中村不折翁の書道博物館竣成祝賀會は十一日午前八時半盛會裡に閉會したが書道界各派の有力者がかくて主賓の健康を祝して午後一堂に會したことは近來稀なることで非常な偉觀であつた、尚地方からは園田湖城、中村眉山、安西米城、淺野松軒、恒川樵谷、沖六鵬の諸氏が參會した

太郎、細田劍堂、國府犀東七條愷の諸氏をはじめ壹百チあり、小笠原伯の發聲に

岡高校教授本田弘人氏が右に就任することに決した、本田氏は熊本縣生れ、東大法學部と京大文學部を卒業まだ三十九歳といふ働き盛りである

書畫に共通であることを思ふと、書畫は敢て別物ではなく、全くその換を一にするのである。

畫には往々識語が書かれてゐるが、それは畫に書きする論に共鳴する傾向がとれないであるが、實は、書と畫とは格別違はないものなのである。

元來支那の文字は象形が多いので、字が既に畫であることは古篆に溯つてみても直ぐにわかる。山でも木でも草でも月でも星でも鳥でも花でも、物に象どつたものがはなはだ多く、組み合せた字にも象形の字が少なからずある。篆字を見ると、宛ども畫を見るがごとくであることは絮說を要しないであらう。篆刻の趣味はどこにあるかと言へば、實は畫的の趣味が頗る濃厚である。その象形文字により、或は山水の圖畫の如きがあり、或は花笑ひ蝶飛ぶの趣きをなすものがある。

に刻するのも、凹凸で一層畫意を切にせんとするに外ならないのである。誰れか篆刻を藝術にあらずと云ひ得ようか。

篆文にあらざる草體の文字に就て見しも、能筆の筆に成つた一幅の書は、各字

斯様なわけ合ひで、書は立派に藝術である。畫と共に堂々たる藝術であるばかりでなく、寧ろ、畫の上に位するところの高貴な藝術

手を浴び、莞爾と笑つて一輯、こゝに所謂珍中の大珍事が完全に成立したわけである。あとになつて、川村驥山老、君イ、涙が出たよ、といつた。

「福岡日日」の學童書方會

福岡日々新聞社主催の第二回學童書方大會は九州一圓に主力を置いて盛大に行はれることになつたが、學校經由〆切は一月十日、同中旬同社に於て豫選が行はれる筈で、課題は左の通り

尋一マツタケ、尋二はつゆめ、尋三日本一富士山

尋四四方拜初日影、尋五勅題田家雪、尋六皇威發揚國運隆昌、高一長生殿裏春秋富、高二踏花同惜少年春

尚同社にては鈴木翠軒氏の文字を擴大した半紙型の下敷手本を調製し一枚一錢づつにて希望者に頒布する由である

午前六時から十二分廟祀圖飾倉三ノ二四の自邸で死去した、享年八十、十八日午後

とになつた　會費一圓五十錢、發行所は岡崎市能見町十四中央書道協會である

賀正

昭和十二年元旦

泰東書道院出版部

泰東書道院代理部

書道と畫道

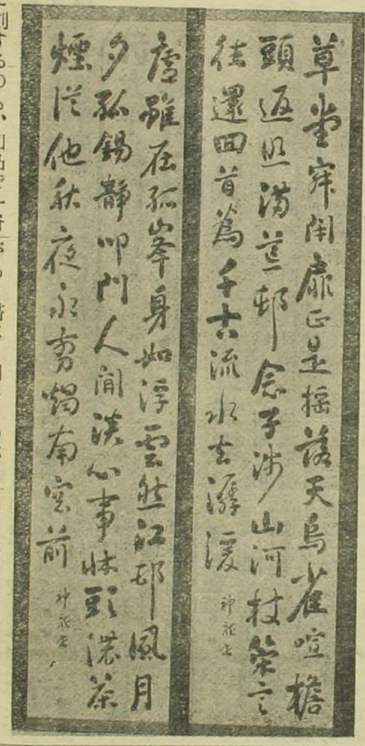
市島春城

世間には、畫を喜ぶ人が多く、書を理解する人は比較的少ない。畫を藝術とすることには大概の人が異存を持たぬが、書を藝術とするには躊躇するものが可成りある。書は姓名を記すに足ると或る豪傑が負け惜しみ言ふたのを楯にとつて、書は記號だからどうでもよい、と考へてゐるものがまだ〳〵多くあり、書を輕んずる論に共鳴する傾向がとれないでゐるが、實は、書と畫とは格別違はないものなのである。

元來支那の文字は象形が多いので、字が既に畫であることは古篆に溯つてみても直ぐにわかる。山でも木でも草でも月でも星でも鳥でも花でも、物に象どつたものがはなはだ多く、組み合せた字にも象形の字が少なからずある。篆字を見ると、宛ながら畫を見るがごとくであることは絮說を要しないであらう。篆刻の趣味はどこにあるかと言へば、實は畫的の趣味が頗る濃厚である。その象形文字により、或は山水の圖畫の如きがあり、或は花笑ひ蝶飛ぶの趣きをなすものがある。

鴛鴦一字の如きは、少し許り筆劃の違ふ字だが、これを抱き合せて印に彫ると、雌雄が相擁してどれが雄や雌やら、一寸辨じ兼ねるものがあつて全くの繪である。印人が篆刻に字の按排布置に苦心するのも、一は畫意を寓さんとするのであつて、或は朱文に或は白文に刻するのも、凹凸で一層畫意を切にせんとするに外ならないのである。誰れか篆刻を藝術にあらずと云ひ得ようか。

篆文にあらざる草體の文字に就て見しも、能筆の筆に成つた一幅の書は、各字大小を異にし、或は長く或は短かく、或は離れ或は連なり、錯綜の間におのづから調子がとれて、同じ字の多くあるものは別樣に書かれ、觀者をして同じ文字のあるを認識せしめず、時には筆が游んで異體の字を挿んで餘裕を示すなど、これらは、書に長じたもので無ければ出來難い業で、斯る書を見て畫を考へると全くその揆を一にすることが知れよう。畫に於ても、墨の濃淡、筆の疎密等で風致を爲すもので、一概に樹木に多く葉をつけたり、花を密にしては畫をなさぬ。巖石でも花鳥でも、位置をとり損じては惡畫となる。その用意は書とどこに違ひがあらうか。書にも飄逸なもの難いことを文にあらはすもので、支那の冬心齋などがやり始めてから、日本でも段々倣ふことになつたが、此の識語は畫を作る時の氣持や、作畫の際の出來事などを錄するのである。例へば、天寒く酒を思ふ折柄或る友人から酒を贈られたとか下物を寄せられたとか云ふやうなことを錄し、往々自家の氣錄を吐いたりもする。これ等は畫し難いことだが、確かに畫に一種の風味を添へるものである。即ち如斯は畫の延長と見るべきもので、書畫もこゝに至ると混融一となる。畫し難いものを文字で書く所に情味があり、あらずもがなの詩を題したり、形式的の題字を書いたりするよりも、



泰東七回展作品

總裁宮賞　森内神龍氏

書畫には往々識語が書かれてゐるが、それは畫に書き此の識語が畫と離る可からざる大切味のあることを感ずるのである。

斯樣なわけ合ひで、書は立派に藝術である。畫と共に堂々たる藝術であるばかりでなく、寧ろ、畫の上に位するところの高貴な藝術なのである。むかしから、書畫とは言ふが、畫書とは言はぬ。畫よりも書を重んずることは、いにしへから支那も日本も同じことであつたが、近時は、てつとりばやく綺麗に眼に映する畫の方が一般に喜ばれ、深甚の滋味ある書道が、一般文化人の關心事とならないのは洵に遺憾の事である。

今の書家たるものは、此の點に就て、大なる自信と勇猛心を持たねばならぬ。單なる字書きに滿足せず、自分はあくまでも立派な藝術家であることを自認し、日常の一點一畫が、すべてこれ藝術修業上の一歩々々であることをよく認識し、この修業道の爲めには、あらゆる困難と戰つて、藝道戰士として、何處までも戰ひ抜くといふ大勇猛心を持たなくてはならぬ。書をよくすることが、自身の生活の資本であるとするが如き微温的妥協的な考へはこの際斷然排除すべきである。

面壁帖

十二月十六日、ステーションホテルに於ける書道博物館竣成祝賀會は、書道界各派の有力者百餘名を網羅したといふ書道界たち初まつて以來の豪華版であつたが、中にも、河井荃廬翁が立つてものを言ふといふことは、書道界珍中の大珍事で、恐らくさうはいふものの當日になつてきつと立つまい、との見解が各所で行はれてゐたものである。ところが、開會の辭がすんで、發起人代表の挨拶となると、すつくと立ち上つた荃廬老、朗々と祝辭を讀み上げて滿場の拍手を浴び、莞爾と笑つて一輯、こゝに所謂珍中の大珍事が完全に成立したわけである。あとになつて、川村驥山老、君イ、涙が出たよ、といつた。

月刊
篆學專門雜誌
雕
定價一部 金三十錢
發行所 東京澁谷原宿一ノ一〇五
振替名古屋一〇五六三番 長思印會

天翔り行かし給へど大けきし君の
み靈を偲びまつるも

榛原製

河骨形煙管

古堀榮

元祿を中心として其前後長期間に亘りて流行した煙管に、河骨形と呼ばれるものがある。煙草渡來當初には、雁首のひの字なりに彎曲した長大の煙管が流行して異彩を放つたが、これは使用に不便であつたと見え、慶長期を盛りとし、其後はいつとなし影を隱した。河骨形は其後を承け、可なり長い間、遙か後世迄愛用された。元來河骨形といふ名稱は、觀賞植物の河骨の恰好から出たのである。第三圖「素絢畫譜草花之部」文化三年板山口素絢畫を參照されたい。雁首は河骨の花、殊に蕾に酷似し、首を傾け細長くすらりとした所など、池中に首を擡げた河骨其儘である。

第二圖は「このころくさ」天和二年板菱川師宣畫の一圖である。（但、本書には題名を缺き、稀書複製會本とは異本）構圖は貧者に物を惠む有福の長者が、悠々喫煙を樂む所であるが、側にある木爪形の煙草盆は、他にも多くの書證があり、當時の流行を示すものである。又手にした長い煙管は河骨形である。河骨形の特徴としては、雁首の咽喉の部分に小穴がある。これは風通しをよくして、煙草の燃燒を助ける爲めである。又雁首と吸口に一本宛の火筋がある。尤も小穴も火筋も無い河骨形もよく見受ける。

次に實物に就き解說を試み參考に供する。

イ 煙銀河骨形唐草文漆蒔繪罐字煙管　長一尺六寸

享保頃の品で、河骨形の代表作。（大日本煙草史料圖錄第一輯五頁七六圖）

ロ 眞鍮櫻河骨煙管　長一尺二寸五分

俗に由比正雪の好みと云はれる。肩付、脂返しなし、茶の湯用。河骨で肩付のものは此形ばかり。

ハ 眞鍮河骨形煙管　長一尺五分

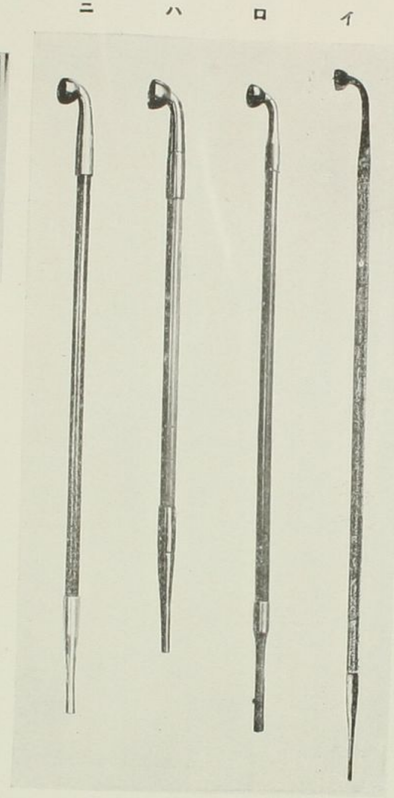
雁首と吸口に各一本の火筋がある。

ニ 眞鍮七度燒河骨形塗羅宇煙管　長一尺二寸

前記櫻河骨の一種。こゝに七度燒と稱するは　銀鍍金の一方法で、錫七分に鉛三分を鎔かし、松脂と交ぜ合金とし、綿にてよく摩擦したものである。燒付は一度丈けで七度燒くわけではない。又俗に七度燒を、水越の天保改革の儉約令に基いて發明されたものゝ如く說くものもあるが、これは受取れない。事實其以前から行はれて居たのである。

第二圖　「このころくさ」

第三圖　「素絢畫譜草花之部」



第一圖

榛原製

うんすん加留多

水町登美

うんすん加留多の「すい」札

ポルトガルカードの印刷

うんすん加留多がいつ頃日本に生れ出たか、その濫觴ははつきりして居ないが、歐羅巴からの傳來物であると云ふ事は、日本のカルタと十五六世紀頃のヨーロッパの加留多の圖柄とを比べて見れば其點はすぐに解し得られる。

うんすん加留多を「天正加留多」とも呼んで居るので、よく天正年間に作られた物の様に云ふ人があるが、これは一寸考へものだ。天正年間にかうしたカルタが盛んであつたと云ふ事は云ひ得るがでも天正の時代に日本に初めて作り出されたとは云ひ得ない。

とにかく、カルタが日本に渡來したのは慶長から天文年間の洋人渡來の頃による物なので、昔から、此のうんすんカルタの事に就て

うんすん加留多「おうる」の「そうだ」の札

スペインカード「コップ印の王の札」

「そうた」の札と云ふのは五枚あるが名稱はスペイン語であつて兵士と云ふ意味だが、うんすん加留多の圖柄を見ると、スペインカードの王の札からいづれも取つた樣に思へる。

は學者連中が色々の本に書いて居るが、一人として日本の發明とは云つて居ない。いづれも南蠻渡りの物であると說明して居る。その南蠻も、スペイン、ポルトガル、イタリーの三ケ國のカードを元にしてそこに日本人の創意を加へて出來上つたものなのである。

三ケ國の古代のカードから取り入れた物ゆゑ、此のうんすん加留多の說明を詳しくする事になると、スペインの古代カルタ、ポルトガルの古代カルタ、イタリーの古代カルタ等に現れて來るカルタの名稱の說明からして行かなければ、どうしても解し得ぬ事と思ふ。さうした詳しい說明は、次號か又の機會で記す事として、今は唯だ日本のお正月の加留多遊びの時に、うんすん加留多と云ふ、古い歷史を持つた物があつて、現今用ひられて居る加留多みたいなあんなおそまつなものではなく、外國のトランプよりもつと美しい藝術的な物であつた、と云ふ事をお知りになつて頂きたい。

此のうんすん加留多は全部で七十五枚あつて「は」「いす」「こつふ」「くる」「おうる」の五種に別れて居てそれが各々に一から九迄の點札と「う

うんすん加留多「いす」の札

イタリーカード 劔印の七

うんすん加留多の「いす」の札と、イタリーカード劔印の札の二葉を此處にならべて見ると、「いす」の札は、イタリーの札から來て居ると云ふ事がはつきり解る事と思ふ。

ん」「すん」「そうた」「ろはい」「とし」「馬」と稱する五枚づつの繪札がある。

勿論今日ではかうした物をなか〳〵見る事が出來ないが、清水晴風氏刊行の「うないの友」の中に原寸原色で記載されて居る。五彩に金銀を加へた美麗極まるものだ。大きさは日本の百人一首位のものである。尙ほうんすん加留多がふちとりになつて居る點は、伊太利式のカードが、裏から折返しになつて居る點を應用したのであらう。

（附記）圖は急場の間に合せに模寫したのでおそまつだが、大躰かういふ格好のものだといふ事で見て頂きたい。

謹賀新年

株式會社 安田銀行九段支店

東京市麴町區飯田町一丁目

電話九段（33）二九三〇 二九三一番

多留加ンすんら札の「すい」

工業興起問題

宮脇 工業興起事業の目的は二千圓で工業委員會、工業講習會、實地指導など各般の事業をやりたい考へである

大井 十一年度に宮脇前知事が非常な意氣込みで發表した工業資源調査はどうした、天然ガスの調査でお茶を濁してゐるでないか

内山 天然ガスの外に電氣、鑛物に就ても調査をやり、資本家企業家に印刷物を送る可く計畫を進めてゐる

大井 電氣の方は調査してゐなかつたのです

大井 概觀して御座なりだ、宮脇サンは非常の熱意を持つてゐられたのに惜いことだ

梁井 新らしい仕事はむづかしいのでどういふ道程で調査するかといふので二十種類に亘つてアウトラインを調べた結果天然ガスにしたのである

内山 とにかく電線の方は電力瞬發問題などが起つて來たので餘程には着手出來なくなつたのです

關矢 調査の金をどうした

内山 一部天然ガスの調査に使つてゐますが、同調査には將來博士になる三刈悦郎氏に依頼して……（博士といふので大笑ひ）

教育費

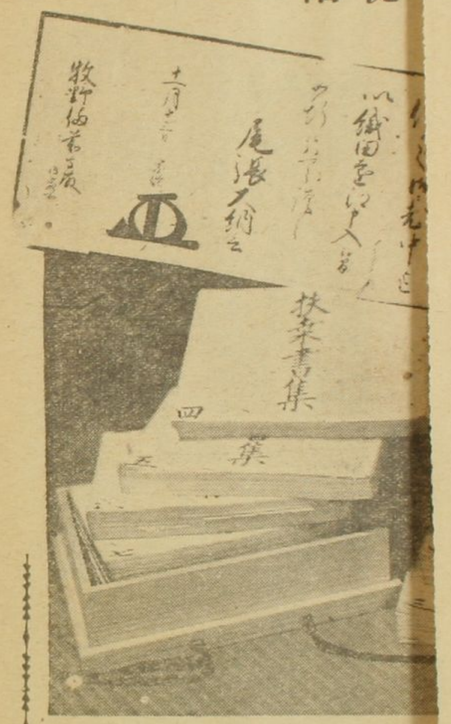
藤縄 郡社に縣が十圓の供進費は少ない町村でさへ十圓出してゐる

中村 中學校の實習科の成績はどうか？縣が一定の標準まで進ませめよと觀察する爲めに標準に達しない學校は他の學校の費用を削つてその方に廻してゐるといふ話を聞いてゐるが可哀想でないか

高畠 その地方々々の實情に應じてやらしてゐるのですがなか

秘書集

帖



（勅撰）五年、卅三歳の實政四年八月大阪城代に（勅撰）六年、同十年京都所司代として禁裏、仙洞を守護し奉ること二年半、享和元年四十二歳の時疑なく老中の大役に就き、溜間大臣、重位にあるや老中筆頭阿部正弘を輔佐し多難なる内治外交に心血を注ぎ、寵待一世を擅にし（勅撰）實に十九年（注中一時退職）名實共に天下の老中であつた、戲「甘藷傳」はこの秘有の逸書年間字内の老侯顯官、二宗總本山より將軍に獻呈する贈で珍の熱力分布幕政の推移を一讀瞭然せしむるものがあり歴史をして垂涎せしむる貴重なる獻である

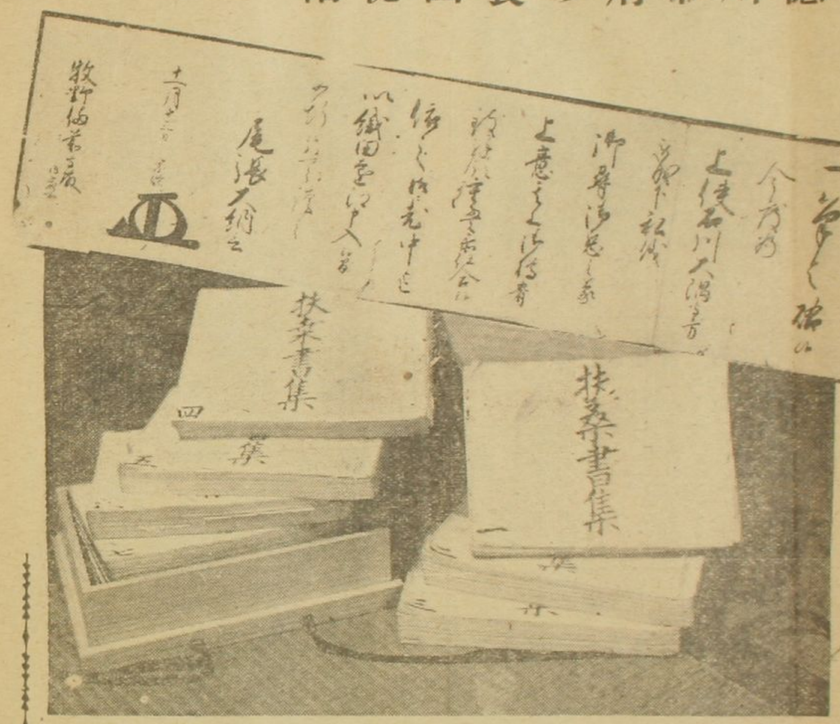
幕政史料"扶桑書集"

徳川幕府の裏面秘帖

牧野備前守への手翰

奇くも長岡市に還る

大橋氏から蒼柴神社へ奉納



本邦實業界の大世話役、柳新太郎氏は長岡九代の藩主で中央政界に進出せる英主牧野備前守が徳川幕府の老中たること十九年、全諸侯及び諸寺院より呈せる贈四百三十九通を九冊に纏め「扶桑書集」と題せる書を先頃入手し蒐し長岡史に重要なる資料たりこれを私すべきものに非ずと長岡製作所、交長市北越製鐵所、長岡製作所、長岡製紙、長岡水電、取締役山口健造氏に諮り蒼柴神社に奉納することとなり今回長岡氏宅に遷された忠臣は人も知る如く幼名新次郎と稱し治世實に六十六年の長きに亘つたが天明七年九月二十八歳にして蒼柴寺社奉行に任じ翌年五年、卅三歳の寛政四年八月大阪城代に、同十年京都所司代として赴任、仙洞を守護し奉ること二年半、享和元年四十二歳の若年で幕中の大役に就き、頭領阿部正弘を輔佐し外交に心血を注ぎ獨特の巨腕を揮つた。實に十九年(老中一時退職)名實共に天下の老中であつた、該「扶桑書集」はこの稀有の勤續年間字内の諸侯顯官、一宗總本山より將軍に獻呈する贈答の數万分の一を一冊宛に纏め、を一冊宛に纏め、をして垂範せしむるものがあり歴史をして垂範せしむる貴重なる獻である

日新聞

（第三種郵便物認可）

變化に富む珍藝

「余技の夕」の先陣を承る關西方では先づトップが關西日本畫壇の人氣者桑本一洋畫伯と上村松園女史の息松章畫伯のコンビによる練達の謠曲、つゞいて端唄・箏曲の菊原琴治師が大津繪と伊豫節を、それが終れば劇作家食蜂南北氏が「引窓」を

得意の

故鴈治郎と延若に風雷の口上をつけた舞色劇、第四番目が映畫俳優眞壽郎氏の長唄で「岸の柳」次は大倉流狂言の茂山千五郎氏が謠曲と絃打つて眼若心經と觀音經に朗々勢きての俗謠を拂拭し、第六番目は義太夫男女聯合の新派劇

一、謠　曲
▼雲
【出演】桑本一洋、上村松章
二、端　唄
▼（イ）大津繪（ロ）伊豫節
【出演】（唄）菊原琴治（三味線）松山初榮
三、聲　色
▼双蝶々曲輪日記（引窓）
【出演】食蜂南北

玄人はだしの藝づくし

東京方の大家連

★…先陣を承る關西方につゞい

★…次は德山璉と三益愛子の兩コ

（右より）今井廣松・安藤幸子・幸田延子さん達

ある、なほ順序は左の通りである

線）柳古葉
八、俚　謠
▼鹿兒島小原良節
【出演】（唄）竹本旭嬢（同）豐竹團司（同）豐竹此助（同）竹本鶴榮（同）豐澤仙平（同）竹本綾助（三味線）豐澤小住（同）竹本清糸（同）豐澤萬之助（同）竹本雛駒（同）竹本廣春（同）竹本東重（同）竹本春駒外洋楽連中

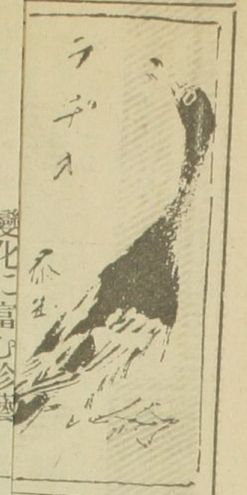
【出演】（唄）飯田蝶子（三味線）吉川蘭子
▼宵は待ち
へ宵は待ち、そして恨みて曉の別れの鐘と皆人の合憎まれ口なあれ喧くわいな合聞かせともなき耳に手を、鐘は上野か淺草か
▼黑　髮
へ黑髮の、結ぼうれたる思ひにはふけて寢た夜の枕とて、ひとり寢る夜の仇枕、袖は片敷く裏ちやというてへ愚痴な女子の心も知らずしんと更けたる鐘の聲、ゆうべの

忙しい年

後六時　ラ

若葉童話劇團の人達が庄野正典一

ラヂオ



フヌバー
体温計

▽六・二〇　コドモのシンブン
▽六・二五　青年の時間「新興ドイツの青年を眺めて」百々巳之助
▽七・〇〇　ニュース
▽七・三〇　余技の夕（各局より）
▽九・三〇　時報、ニュース、明日の話題、氣象通報

その他の局

ピアノ獨奏（ダイルヘルム・バック（ハウス）（イ）「圓舞曲」第一、第二及び第十五番（ブラームス作曲）（ロ）「ハンガリア舞曲」第六及び第七番（ブラームス作曲）

榛原製

科學の權威者を前に「忍術」の奥義講習

藤田西湖氏の實演に舌を巻いたお歴々

◇…言に詳し、書に隠れ、雷鳴を轟し、蛇蝎を役し、鬼ちにして不余の怪物と號し、祭りとして尺寸の鼠と化すといふ、隠遁出没の忍術——皇來也、大蛇丸、仁木貞正からさては鼠小僧、石川五右衛門につきまつものゝ、その實際を知るために

◇…現代に變る唯一の忍術家、甲賀流第十四世藤田西湖氏を招いてこの科學時代の実験をゆく科學ペン・クラブの人々は講演を聴き眞剣を見た。

◇…出席の主なる人々は入澤達吉、飯野十三、八木敏政、中原虎男、金子準二、野尻抱影、藤原鎌一、岡山巌、阿部優造の諸氏

◇…「科學者、忍術を聴く」題目取り合せではあつたがいさゝか煙に巻かれた形だつた、席上講習をお取次する

忍術といへば妖術のやうに

人があるが、忍術こそは日本男子の尚武の徳意が、忍術なる武術にまで進まんといふべきで忍術家の目的として忍術であり、軍事秘術の目的として忍術の結まつた時代の記録を調べると支那では上古伏羲、神農から結まつて居る

忍術の流派は伊賀流甲賀流

が世に聞えて居る、それは、近江の甲賀郡、伊賀の伊賀郡なる地が険しく、山嶽多く、谷深く、戦国時代から幾多の豪族が割據して相伯うて居るので自然間諜の活躍を奮起したゝために、忍道はこの地方で發達し一層の秘術が磨まれ、遂にこれが流派となつたもので

信川時代には江戸城のお庭番になり、腰密の役を命ぜられて活躍、甲賀流組は三千五百石の旗本であつた、諸國の間諜を勤め全國の城の見取圖をつくつて居る神田の甲賀町に甲賀流の忍者が住み、四谷の伊賀町に伊賀衆が住み、その配下の者が麻布の笄町に機を隠て住んでゐた訳だ、名も「甲賀伊賀町」と呼んで居たが後に二つを一所にして「笄町」と呼ぶやうになつた

忍術の練磨は水の中に十分

忍者は正直、剛毅、身體の鍛錬を三大倉格とする、さて忍術者になるにはあらゆる苦難の鍛練を積むのであるが、術者に熱心があれば誰人の業をも容易であるから、人格のすぐれた者であらねばならぬ。石川五右衛門などといふ賊は忍術者とすれば下手クソだが、術者が道をあやまれば五右衛門のやうな怪賊になるおそれがあるので忍術傳書には正しい武道精神の必要を說いて居る、そして忍者は正直、剛毅、身體の鍛錬を三大倉格とする、さて

問あまりも言を突き込んで心臓の弱い點を試す、次に鼠穴の上に紙を張りそれに水を撒いて鼠をせ、紙を破らずに通るなどの鍛練

必要とあらば斗酒尚辭せず

しかも、さまざまに酔はない訓練もあり、酒盃でもその通りである（藤田氏は記者に水パットを乞つて一杯の水を鼻の穴にさし込んで水をつけて煙を吸ふ、とこ

次は水を潜る術の練習だ

忍び泳ぎは流れにまかせて手足を動かさずに泳ぐ、水の面を歩く術、水中の水面を泳ぐ術もある、潜水器も忍者は四百年前に使用した

身體を苦しめる事に馴れて

居なくてはならぬので、ひつたつた練習をする、そのため、全身に針、針に堪へて居る（吾を出して針を刺して見せる、醫學者たちもいさゝか面喰ふ、血も出ない。舌に大きな針を刺したまゝ話をする之名醫家から賞問が續出した）

武術百般の外に虚無僧

槍術、手品なんでも驚くに通じたければ忍術者の資格はない、私も

（そこで新聞紙一枚をくるくゝと巻いて吹くと尺八の妙音を出す、次には、マンドリンの如音を出して喝采を博す）

忍術者は犬、猫その他の動物を使ふ必要があるので動物の撥音も練習する、犬など三千五音、三千五通りの啼聲があり、白、黒、ブチ、赤などによつてそれぞれ啼聲も違ふ（犬の啼聲の實演を行ふ、いろいろ種類の啼聲や犬の唸唸など以上の巧妙さである）

化學の進歩しなかつた

これが忍術に行はれると、狐狸と魔術と忍術から術者が使つた五寸の釘が五尺にも見え、火薬の爆発は電光雷鳴にも見え、仁木貞正は實際に變化したと見え、石川五右衛門は世にも不思議な妖術使ひの大賊と思はれ、不敵はたちまちに霧の中に身體を消したと見えたのであらう、忍術の秘訣は敵手を夢幻境に陥入れる處にある、同時に、忍術者はもつともすぐれたスパイであつた

（富士は書齋における藤田西湖氏）

出版界

▲山田仁左衛門長政（三木榮著）山田長政は一假想人物として將に抹殺されんとしたが、著者の心新究の結果、その偉大なる事績の明瞭なる發掘を與へられその存在を明白にしたるは、實に愉快とせざるを得ない、全くこの研究に於ては氏を以て第一人者とすべく、恐らく何人もこれに追隨する事を許さぬものがあらう（四六判三〇六頁二圓、神田鑑河台二、古今書院）

▲新國史論叢大森金五郎著）著者の前著に收錄せざりし論考及び講演十五篇を集めたもの（國史の使命）（われ國史より顧たる政治の變遷）等、平易通俗なものもあるが、（鎌倉右大將政道與奪問題）等研究的な論文をも收めてある。

▲秋島集（今井邦子著）今井さんの第二隨筆集、といつても四季折折の動きを書いたものや、お尋意の歌など交つてゐるが、社會に對し人生に對する詩歌的な中心をなしてゐる、よつて以て一生年女性の眞情を十分に讃歌する事が出來る（四六判三〇〇頁一圓九十錢、神田三崎町二信社）

▲いのちの初夜（北條民雄著）文學界賞を得た「いのちの初夜」をはじめ文學界、中央公論、改造等に載つた短篇八篇、これが著者の處女作から今日まで、に發表された總てゝある、我國最初のまことの癩文學集（四六判二五五頁一圓三十錢、赤坂伊ノ町五番地元社）

▲新編思出處（吉川英治著）義士傳は數々あるが現代人の親しみ得る昭和定本なき名作で、著者は荷志久しき後、書くべき人物を成して、元祿文化の傑作とその中に生きた人間を書かうと試みたのである（四六判七七五頁二圓、牛込矢來町新潮社）

▲音楽講習書Ⅱ・ピアノ音楽（野村光一答田光吉近藤柏次郎共著三四五頁一圓五十錢、神田鑑保町三清堂社）

▲ブウシキン全集Ⅰ・ペールキン物語他三篇（神西清等譯四九二頁二圓五十錢、芝新橋改造社）

▲創立二十周年記念島事試驗場報告（福公主馬太場篇、（蠶農事試驗場編三八頁非賣、同所）

▲乃木將軍日記（大野信太郎編二六頁一圓五十錢、板橋市鶴見驛東口郵天野信太郎）

▲日蓮主義處世道（中川日史著三七八頁二圓五十錢、京橋區銀座西一賣業之日本社）

▲實用繃帶の個ひ方と加工法（月野誠道著三〇七頁一圓五十錢、神田神保町泰文社）

▲音楽の話（倉重勝輔著、二四五頁一圓、牛込區西五軒町シンフォニー楽譜出版社）

▲現代實用支那語講座八・民族篇（結岡三郎編三〇二頁一圓、本郷區本郷三文求堂）

▲街の自然愛好者（細川徳治著三四頁一圓五十錢、大森區出版圖布二名北文館）

▲讀書讀書一・敵より禍へ（穂大眉著三六八頁一圓六十錢、赤坂區表町三新美社）

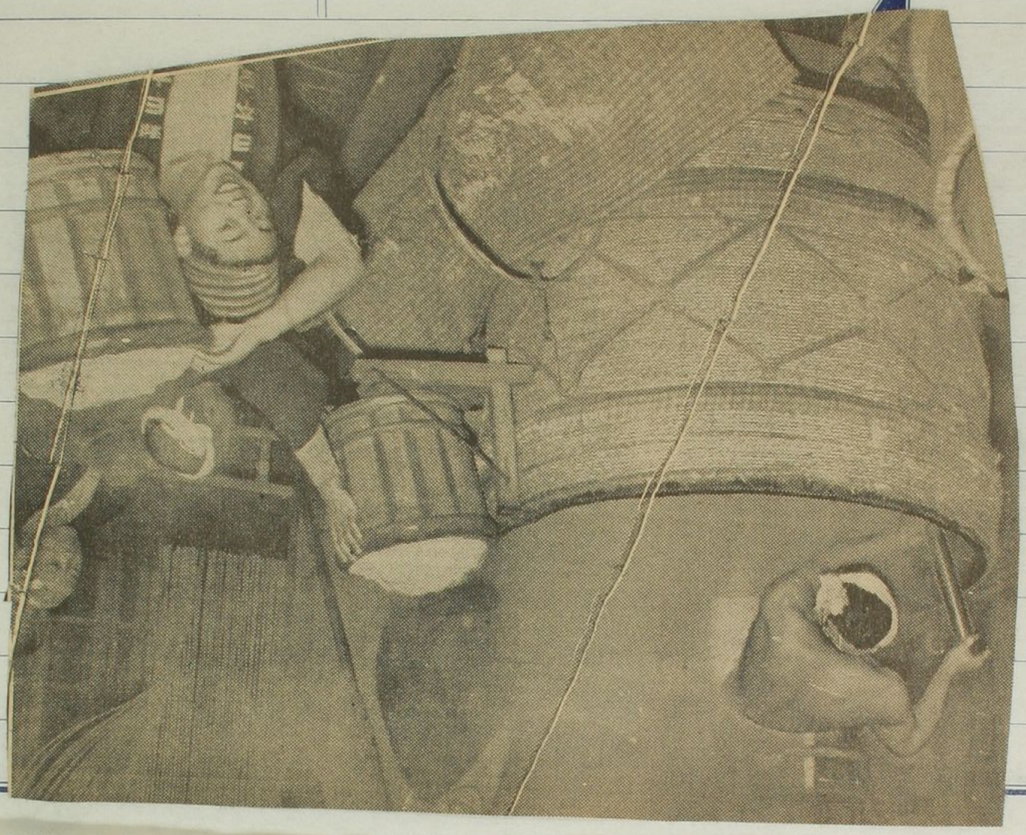
▲少數流彈（ケッセル著水戸俊雄譯三二四頁一圓三十錢、牛込區矢來町新潮社）

▲能樂技師二官登場（坂本東圓著二九六頁一圓二十錢、神田區神保町三併精社）

▲後ろかをり（印東良編八八頁非賣、本郷區西片町印東良編）

▲柴天公子（鈴子文六著三〇八頁一圓、神田小川町三白水社）

廣告



東西比較趣味番付

地理的内容的嗜好的

東京			蒙御免	大阪		
公園	盛場	花街		公園	盛場	花街
建物	山川	劇場	四本柱	建物	山川	劇場
宮城	河川	橋梁	東京	大阪	河川	橋梁
叡山	道路	道路	東京	大阪	道路	道路
東叡山	隅田川	銀座	東京	大阪	心斎橋	天神橋
上野公園	浅草	柳橋	東京	大阪	淀川	中座
上野公園	浅草	歌舞伎座	東京	大阪	茶臼山	南地
上野公園	浅草	兩國橋	東京	大阪	大阪城	道頓堀
性格	志操	思想	政治	性格	志操	思想
傾向	批判	進退	學術	傾向	批判	進退
生活	生植物	態度	經濟	生活	生植物	態度
男性的	奇機的	精神的	技藝	女性的	物質的	佛寺的
芸妓的	山峠的	社寺的	技藝	娼妓的	閣寺的	河川的
味覺	食品	魚類	肉類	食品	魚類	肉類
濃淡	浅草海苔	牛まぐろ	野菜	味覺	味噌	野菜
音曲	三味線	小松菜	技藝	音曲	鯛	技藝
歌舞	澤	肉	音曲	良	鯛	舞
三味線	澤	菜	歌舞	淡	鯛	義太夫
三味線	澤	菜	歌舞	淡	鯛	義太夫
言語	スポーツ	言語	社味趣洋東	言語	スポーツ	言語
ベランメー	野球	澤	大阪新聞	アホラシイ	マラソン	太夫

司 大阪新聞
行 東京雜誌
勸進元 東洋趣味社

金澤種美案

蒙御免 動物壽命番附

| 東 | | |

←平安朝時代「やすらい踊」

閲覧室

←鎌倉時代「女房の物詣」

東京製